

教科書文庫
4
920
42-1927
2000081279

模範裁縫教科書



三 省 社 會 式 株 堂

41252

教科書文庫

4
920
42-1927
20000
81279

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

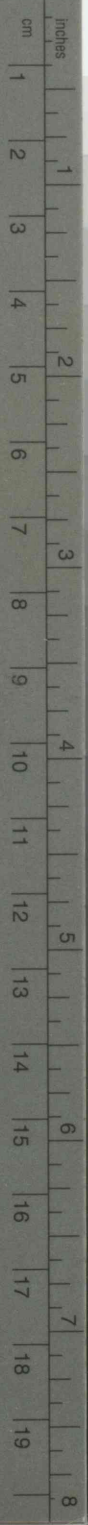


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



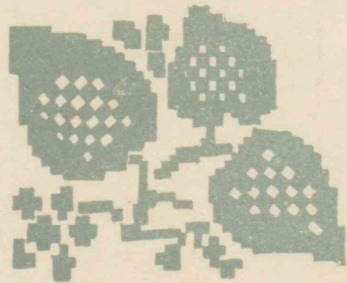
資料室 日七月十年二和昭
濟定檢省部文
用科縫裁校學女等高

教科書文庫
4
920
42-1927
2000081279

模範裁縫教科書

大妻コタカ著

参 考



広島大学図書
2000081279

社 會 式 株

堂 省 三

4b
430
BBZ

四つ身羽織



四つ身被布



はしがき

一、本書は、高等女學校教授要目に準據し、高等女學校及びこれと同程度の各種學校の裁縫科の教科用書に充てたいために編纂したものであります。

二、本書は、實際教授上の便宜から、文部省教授要目の順序を變更し、且つ要目に掲げられてゐないものでも實際必要なものは之を附加しました。

三、本書は、四箇年又は五箇年の高等女學校のいづれにも適切な教科書とするために全體を五卷に分け、第一卷から第四卷までは和服、第五卷を洋服として、各學年の配當は次のやうに致しました。

四箇年程度の學校では、第一學年には第一卷、第二學年には第二卷、第三學年には第三卷、第四學年には第四卷と第五卷とを併用させます。

又五箇年程度の學校では第一卷から第三卷までは前者と同様に扱ひ、第四卷と第五卷とは第四・五學年を通じて併用させます。

四、本書は、多年の經驗と研究とを基として、種々の方法の中から最も一般的と思はれるものを採用し、徒に理論に走らず、流儀に囚れないやうにいたしました。

五、從來、使用の鯨尺、曲尺がメートル法になりましたので、これまでの寸法については適宜にこれを取捨し、學習者の實習と記憶とに便利なやうにいたしました。

大正十五年十二月

著者 しるす

模範裁縫教科書 卷三

目次

第一章	本裁女物衿羽織	一
第二章	本裁女物單合羽	二
第三章	腹合せ帯	三
第四章	絹布毛織の繕ひ方	三九
第五章	本裁女物綿入	四四
第六章	本裁男物衿羽織	四九
第七章	中小裁羽織被布の裁ち方	五二
第八章	足袋	五五
第九章	ミシン使用法	六一
第十章	婦人シャツ	六六
第十一章	涎掛と子供前掛	七一
第十二章	割烹前掛	七七

教 授 要 目

注意 (一)の中の字は巻数を示したものであります
これは一週四時間の要目であります

學年	一 學 年	二 學 年	三 學 年	四 學 年	五 學 年
基礎的技術……………(一)	一つ身綿入……………(二)	本裁女物給羽織……………(三)	男袴……………(四)	本比翼……………(四)	
襦 袢……………(一)	本裁女物給……………(二)	女物單合羽……………(三)	男物單羽織……………(四)	附比翼……………(四)	
本裁女物單衣……………(一)	寝冷え知らず……………(二)	腹合帯……………(三)	薄物單衣……………(四)	單衣重ね……………(四)	
本裁男物單衣……………(一)	本裁男物給……………(二)	絹布・毛織の 縫方……………(三)	子供洋服につい て……………(五)	給半コート……………(四)	
四つ身單衣……………(一)	女 袴……………(二)	本裁女物綿入……………(三)	子供服寸法 とり方……………(五)	男 帶……………(四)	
四つ身給……………(一)	綿布の繕方……………(二)	本裁男物給羽織……………(三)	子供服下着類……………(五)	小學生服……………(五)	
子供帶……………(二)	女物給長襦袢……………(二)	中小裁羽織被布 の裁方……………(三)	男女兒服……………(五)	女學生服……………(五)	
下穿……………(二)	一つ身袖無羽織……………(二)	足袋……………(三)	小袖・模様・紋に ついて……………(四)	男學生服……………(五)	
		ミシン使用法……………(三)	小袖給重ね……………(四)	ケープ……………(五)	
		婦人シャツ……………(三)	男兒服……………(五)	女兒外套……………(五)	
		涎掛と子供前掛……………(三)		夜具類……………(四)	
		割烹前掛……………(三)		大中物裁方……………(四)	

模範裁縫教科書 卷三

第一章 本裁女物給羽織

● 普通仕立上げ寸法

- 袖丈 着物と同寸 後巾 着物と同寸
- 袖口 着物と同寸 前巾 一八糎五耗(五つぱら)
- 袖附 一糎増し(又は五耗増し) 衿巾 六糎五耗
- 袖巾 三―四耗増す 襟巾 上二糎
- 身丈 着丈の四分の三に 下六糎五耗十七糎
- 四糎を加へる
- 普通一米内外
- 衿肩明 七耗増し
- 前下り 三糎五耗
- 乳下り 背より四四糎内外
- 身八つ口 一〇糎

縮入の口 着物と同寸

裁ち方と積り方

表の裁ち方

表總用布から袖丈の四倍と衿布とを取り、その残りを身頃にする。衿布とは、衿肩明と前下りと、肩の繰越しの二倍と、衿先縫ひ代との合計凡そ二十三糎を出來上り身丈に加へて、それを二倍したものである。身頃は、前後の差として十五糎前身頃を長く裁つか、又は前下りの仕立に要する分と繰越しの二倍を長く裁ち、而して胴裏を前後同じ長さに裁つてもよい。前身頃は巾十糎五耗を裁ち切つて袖口布襠布乳布等とする。袖口布としては五十五糎のもの二枚、乳布としては一糎五耗のもの二枚をとり、残りを二等分して左右の襠布とする。

裏の裁ち方

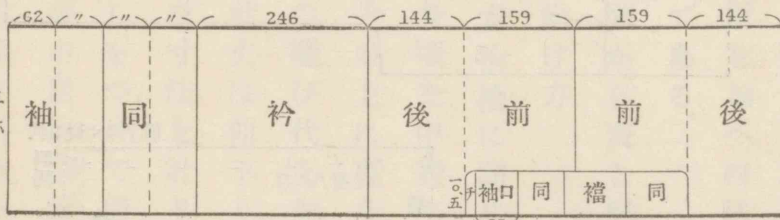
出來上り脇の身丈の二倍から表裁ち切り後身丈を減じ、それに胴接ぎの

繰越し

一糎以上

女物羽織表の裁ち方

表用布並巾 11米
 出來上り身丈 1米
 裁ち切り袖丈 62糎



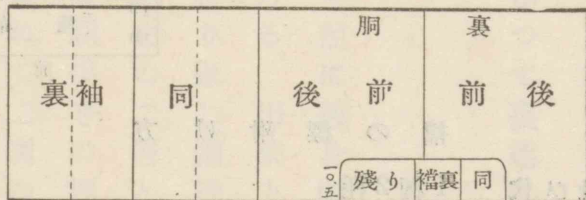
第二章 本裁女物袴羽織

積り方

公式 $\{用布 - (袖丈 \times 4 + 衿用布 + 前後の差 \times 2)\} \div 4 = 後丈$
 後丈 + 前後の差 = 前丈
 $(身丈 + 23糎) \times 2 = 衿用布$
 $\{1100 - (62 \times 4 + 246 + 15 \times 2)\} \div 4 = 144 \dots \dots 後丈$
 $144 + 15 = 159 \dots \dots 前丈$

公式 $(出來上り身丈 + 衿肩明 + 前下り + 衿先縫ひ代 + 繰越し \times 2) \times 2 = 衿丈$

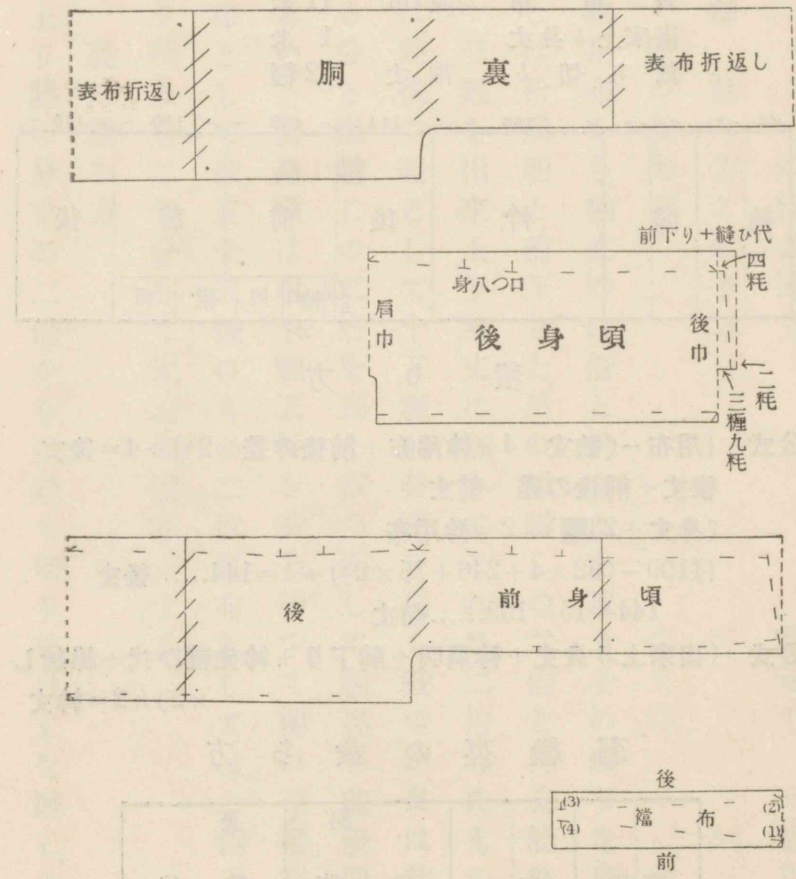
羽織裏の裁ち方



積り方

公式 $袖丈 \times 4 + (出來上り身丈 \times 2 - 後丈 + 胴接ぎ代) \times 4 = 裏總用布$

標 附 け 方 圖



襷 の 標 附 け 方

- 1 縫ひ代 1 糎 2 耗
- 2 下の襷巾
- 3 $(\text{下の襷巾} - \text{上襷巾}) \div 3 + \text{後襷の縫ひ代} = \text{後上部縫ひ代}$
- 4 上の襷巾

縫ひ代四個所を加へ四倍してこれを胴裏とし、尙袖用布を加へたものが裏の總用布である。

胴裏の前身頃から表と同じ様に巾十糎五耗を裁ち切つて裏襷にする。

標 附 け 方

- 一、袖 本裁女物袷に同じ。
- 二、身頃 表身頃を中表に合せ、衿肩明を揃へて、背を手前に、後身頃を左にして置き、その上に裏身頃を重ねて要所に躰をかける。出来上り身丈に三つ衿の縫ひ代を加へて身丈を計り、表身頃を折り返し、胴接ぎの標をする。前丈は前下り及びその縫ひ代と肩の繰越しの二倍とを後身丈に加へた寸法を計り、後身頃と同様に折り返して胴接ぎの標をする。次に繰越しをつけて前身頃の上に後身頃を折り重ねて、二圖のやうに置き、背縫後巾・袖附身八つ口・肩山裾の山前下り等の標をつける。次に襷の寸法を計り後身頃を取りのけて、前身頃に圖のやうに、乳下り。

衿附等の標をつける。
 前下りを三糎五耗に出来上るやうにするには襠附の處で後身丈より四耗長く標をつけ、衿附の方で前下りに同じく四耗を加へてつけ、その間に圖のやうに斜に標をすると三糎五耗の前下りとなる。

三、襠 表裏共中表に重ね、表襠を下に裏襠を上へのせ置く、襠上の縫ひ代をつけ次に丈を計り、表襠を折り返して胴接ぎの標をつけ、待針を打つか又は躰糸でとどけて置く。

(1)の標、まづ裾に前襠附の縫ひ代を一糎につけ、次に山標をつける。

(2)の標、下の襠巾の標をする。

(3)の標、下の襠巾より上の襠巾を減じ、その残りの三分の一に後襠附の縫ひ込みを加へて標す。

(4)の標、上の襠巾の標をつける。

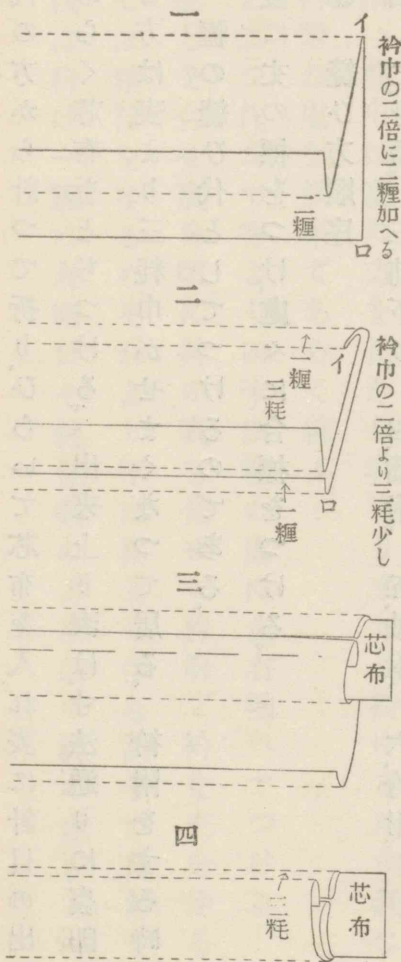
(1)と(4)、(2)と(3)の標の間にそれぞれ斜に標をつけ、而して三分の一の斜

の方を後襠附とし、三分の二の斜の方を前襠附にする。

四、衿 表を下にして置き、出来上り衿巾の二倍に衿附の縫ひ代と紵け代として二糎を加へて、イ・ロまでの巾として折り、更にロより二糎を控へて一圖のやうに折る。

イより一糎三耗に折つて縫ひ代とし、ロより一糎を折つて紵け代とする、(二圖)残りは衿巾の二倍より三耗せまいものとなる。次に衿巾を縫

衿の折り方圖



ひ代の方から計つて折り、ひらいて芯布を入れ表に針目の出ないやうにあらく芯布をとちつける。出来上り表は寸法通りに、裏即ち紵けつける方は表より三耗巾がせまくなつて居る。衿附をする時は兩方も一纏の縫ひ代としてつけるのである。最後に丈の標をつけ、處々に合標をつける。

④ 縫ひ方順序

一、袖 二、身頃。三、前下り。四、襠附。五、袖附。六、衿附。

一、袖 本裁女物袴と同じである。

二、身頃 後前の胴接ぎをして、折りは胴裏の方へ返し、二纏の針目で隠し、襠をし、次に背縫をする。

三、前下り 表は標附の通り、裏は標より四耗内を縫ひ込むやうに待針をして、前巾の標の間だけを縫ふ。きせを二耗かけ、裏に折り返して二纏の針目で隠し、襠をする。出来上つての見返りは二耗になる。

四、襠附 襠の胴接ぎをして、折り目をつけ、隠し、襠をする。襠の上を縫つて、けぬき合せとし、襠巾の中央を襠で表裏とち合せ、その三分の一の斜の方を後身頃の表裏で挟んで四枚一緒に縫ふ。同じやうにして前襠をつけ、きせをいづれも身頃にかけ、次に背縫をとぢる。

五、袖附 襠附の上部に留をして身八つ口を縫ひ、袖附をする。

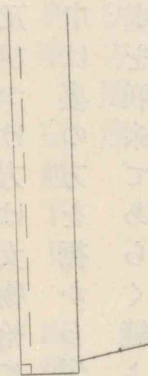
袖附の留及びつけ方は女物袴に同じ。

六、衿附 前巾は裏の方を裾から乳下りまで心持ゆるめ加減にして前身頃衿附の處を襠糸であらう縫ふ。

乳を二つ作つて脊より四十四纏の處に左右揃へてつける。衿の山と背縫とを合せ、裏身頃に衿の表を合せて衿肩で衿を充分ゆるめ、乳下りまでは稍衿をゆるめ、それより下は裾まで平な調子に待針を打つ。縫ひ代は衿は一纏に身頃は七耗位、裾の方は二十纏の處から一纏斜にする。

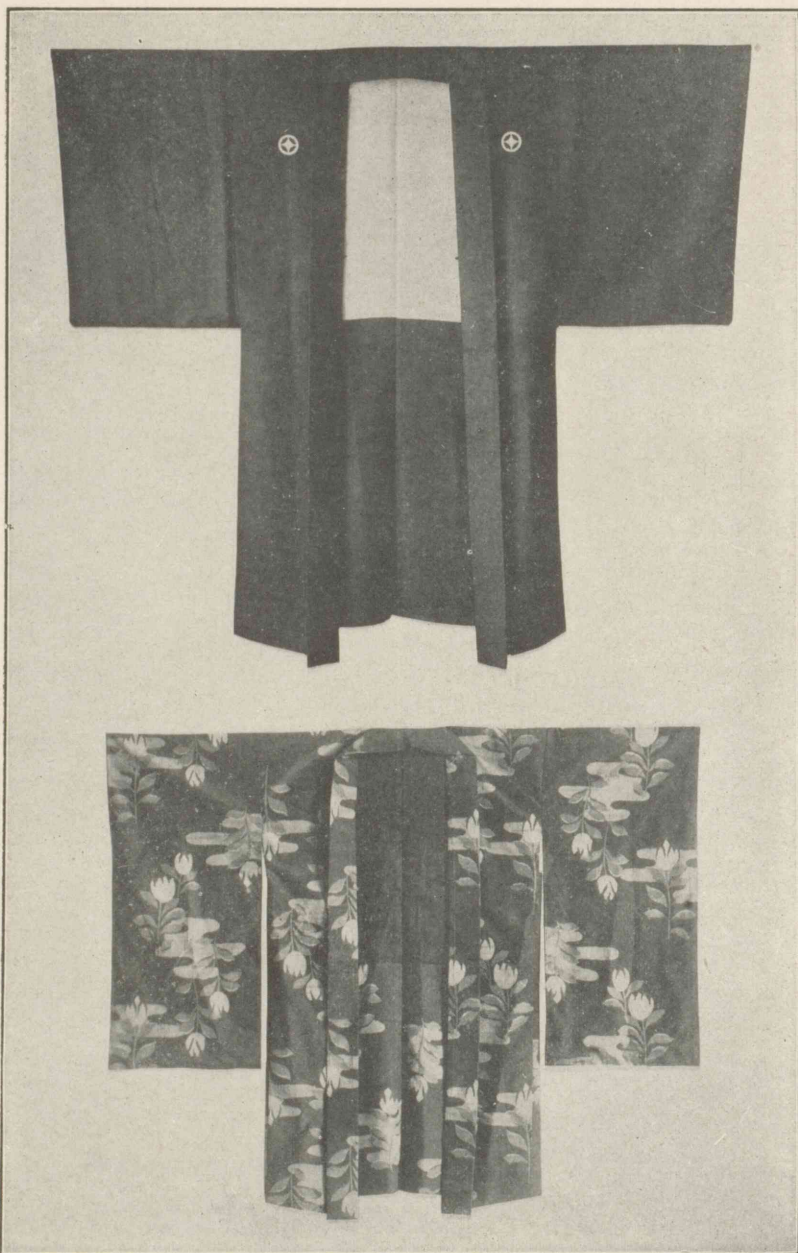
左身頃より衿の方を見て縫ひ始め、裾の十糎位の間と衿肩廻しと乳の處は半返し縫にし、他は一針ぬきにして全體衿をつける。縫ひ目に烙鏝をかけ、きせをかける、衿先は一糎先を縫ひ、縫ひ代を衿にとちつけ、表返して衿を拵けつゝける。最後に衿に圖のやうに襷をかけ、仕上げをする。

衿の襷の圖



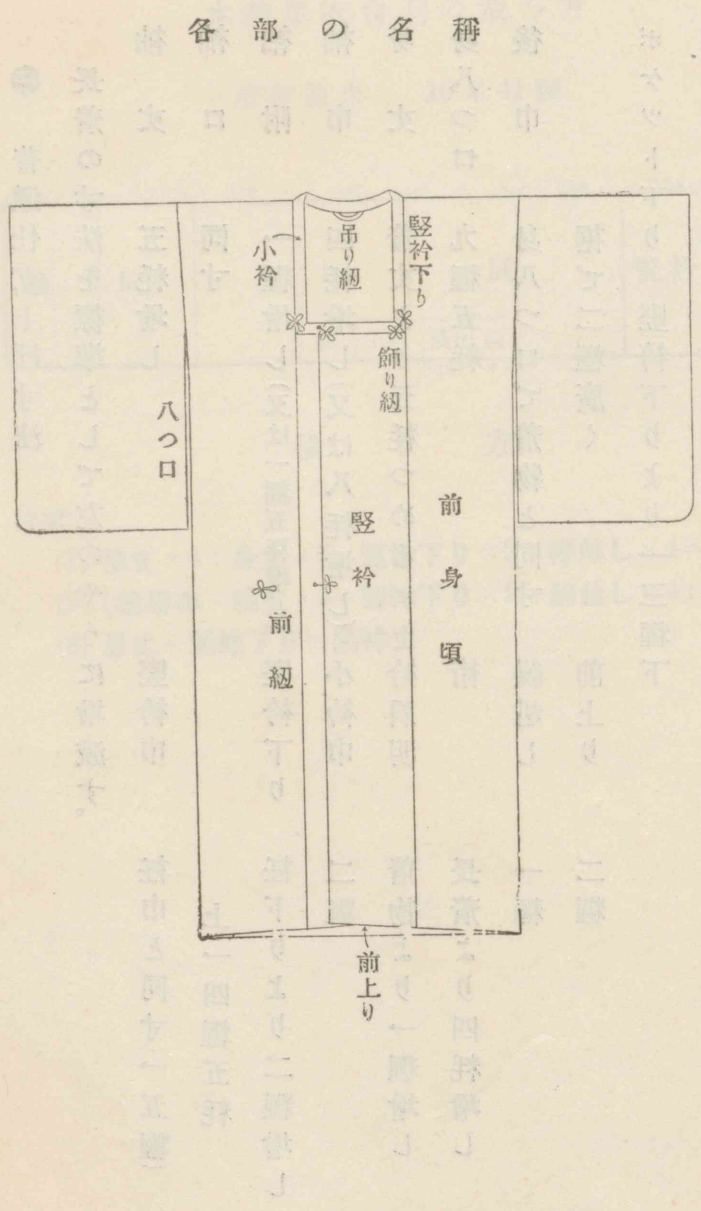
備考

- 一、一反十一米二十八糎で女物裕羽織の表の裁ち方をせよ。但し袖丈七十糎とし他は全部普通寸法にし裁ち切り後身丈の計算を求む。
- 二、前下りの標附け方と縫ひ方を問ふ。
- 三、衿の折り方を問ふ。
- 四、襟巾、六糎五糎として襟の標附け方の復習をせよ。



男物裕羽織(上) 女物裕羽織(下)

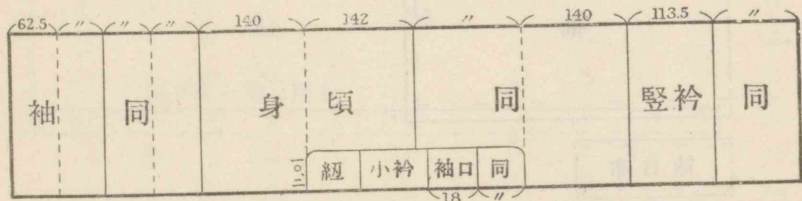
第二章 本裁女物單合羽



第二章 本裁女物單合羽

本裁單衣合羽の裁ち方

用布並巾 10米41糎



積り方

公式

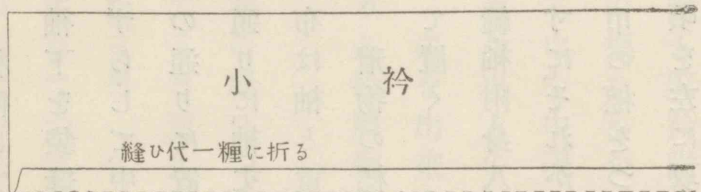
- (1) 袖丈 × 4 + 身丈 × 6 - 縦衿下り × 2 + 繰越し × 4 = 總用布
- (2) (總用布 - 袖丈 × 4 + 縦衿下り × 2 - 繰越し × 4) ÷ 6 = 身丈
- (3) 身丈 - 縦衿下り = 縦衿丈

● 普通仕立上げ寸法

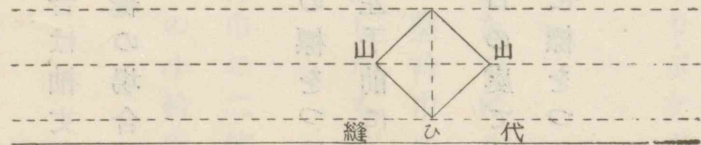
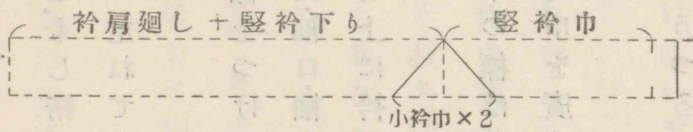
長着の寸法を標準として左のやうに増減す。

袖丈	五糎増し	縦衿巾	衿巾と同寸、一五糎
袖口	同寸	衿下り	衿下りより二糎増し
袖附	一糎増し(又は一糎五糎増し)	小衿巾	二糎
袖巾	四糎増し(又は八糎増し)	衿肩明	着物より一糎増し
身丈	着丈より五糎つめる	衿	長着より四糎増し
身八つ口	九糎五糎	繰越し	一糎
後巾	身八つ口で着物と同寸	前上り	二糎
ポケット下り	縦衿下りより一三糎下		
ポケット口明	一四糎		

方 け 附 標

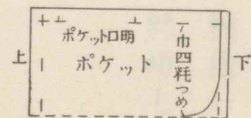
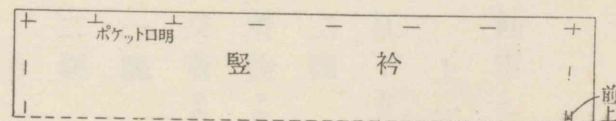
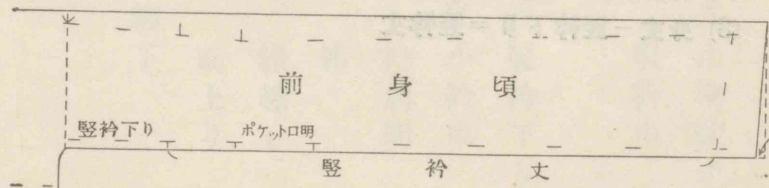
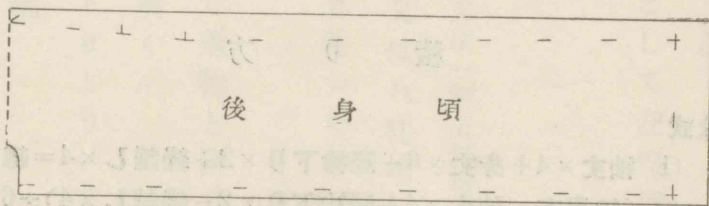
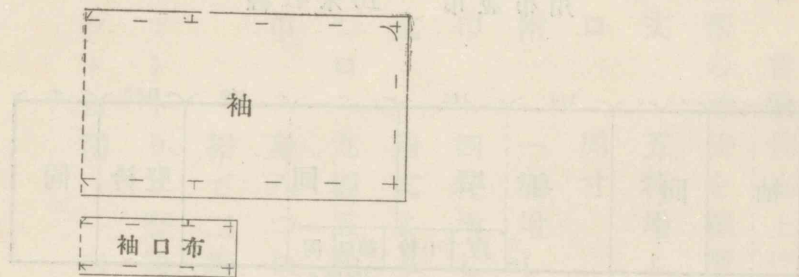


小衿巾に折る



三 四 五

本 方 單 け 附 標



③ 標附け方

一、袖 袖下を袋縫か又は三つ折り筋にする、もし筋ける場合は、袖丈を五耗程ずらして、中表に折り、兩袖を向ひ合に重ねて置き、袋縫の場合はいつもの通りに置く。

寸法通りに、袖丈袖口袖附袖巾・山丸みの標をつける。

袖口布は袖と重ねずに別にして置き、袖丈袖口袖巾・山等の標をつける。

二、身頃 着物の標附け方のやうに後身頃を上、衿肩明を左手前にして重ねて置く。

丈脊縫袖附身八つ口等の標をつけ、次に巾の標は身八つ口の處で後巾と同寸に、それから裾まで自然に二糎程身巾を廣げて斜に標をつけ次で肩巾の標をつける。

後身頃を左に取り除けて、前身頃の標附にうつる。

袖附身八つ口巾の標をうつし取つて裾に一糎二耗の前上りの標を斜

につける。

小衿附と豎衿附の縫ひ代を一糎に標をつけ、次いで豎衿下り・ポケット口明の標をもつける。

三、豎衿 巾を中表の二つ折りにして二枚重ねる。

丈巾ポケットの口明の標をつけ、裾には八耗の前上りの標をつける。

四、小衿 巾を出來上り小衿巾の四倍に正しく裁ち切り、丈は豎衿巾に豎衿下りと衿肩廻りと繰越しと衿先縫ひ代とを加へて二倍したものとす。

小衿布の縫ひつける方を一糎に折り（小衿標附一圖）、次に小衿巾の二倍に折つて（三圖）、更にそれを中央から二つ折りにして、出來上りの小衿巾にたたむ。（三圖）

次に丈を二つに折つて（四圖）、山丈・額縁の標をつける。

額縁の標は中央に假に標をつけ、それより兩方へ小衿巾を計つて斜に

標す、下の方に標のつけにくい時は左右別々に付けてもよい。
五、ポケット長さ三十糎とし、巾は豎衿巾に縫ひ代を加へたものを裁ち切りとし、輪を手前に上部を左に置く。

上部の縫ひ代は八糎につけ、次にポケット下りの標をつけ、その標よりポケット口明の標をつける。

巾は豎衿出来上りより四糎を減じた寸法に標をつける。

ポケットの下の縫ひ代を八糎とし丸みをつける。

四 縫ひ方順序

一、袖 二、身頃 三、小衿。

一、袖 袖口布の下を押へ縫とし、表袖と袖口布との袖口明を縫ひ合せ、袖口の留をし、袖下の袋縫の時は浅縫をして次に袖口留の下から、袖を縫ふ、この際、袖口布の丈までは四つ縫にし、縫ひ代は自然に折り、袖口布の奥を紵けつける。

二、身頃

本裁單衣のやうに脊を二重縫にして肩當布をつけ、次に豎衿をつける。

豎衿は、脇縫をしない前につけるから前身頃の裾紵け代を、三つ折にして假りに躡て押へて置き、豎衿で前身頃を挟んで、丈標や、合標を合せて、一針抜きか、又は抄ひ針にして豎衿をつける。

次に下前は、裾からポケットの口明までを上前のやうに縫ひ、ポケット口明は縫ひ残して置いて、口から上は豎衿の表と身頃と二枚を縫ひ、ポケットをつける。

豎衿の下は、丈標より四糎先を縫つて裏の方へ折り、縫ひ込みを豎衿附の縫ひ目にとぢつけて引き返し、折りを正して下前豎衿の裏を紵けつける。

三、豎衿上の縫ひ代は、表裏とも豎衿下りの標から三角に内へ折り込んでおく。

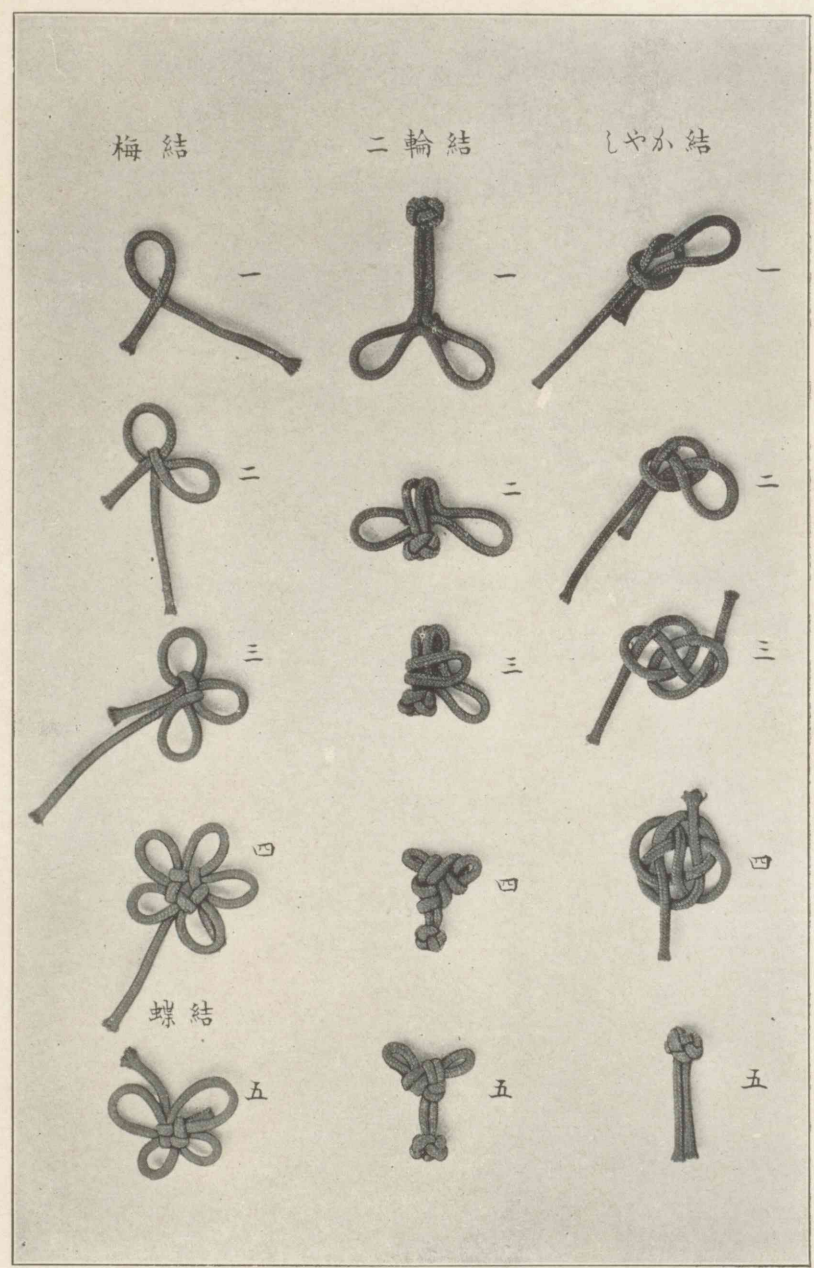
次に脇縫をして縫ひ代を拵けつけ、裾拵をする。

三、小衿 縫ひ代を折つて、圖の山の標の角を合せて留をする。留の仕方はまづ、堅衿下りの角から針を出し、小衿の額縁を極く小さく布織糸一二本とも思はれる位を抄つて針をもとの穴のすぐそばへ出して裏で結んで切る。

額縁の處は中から縫ふことは困難であるから、二糎程の間は掛け接ぎの仕方のやうに、接ぎ縫にする。

全體に待針を打ち、衿肩の丸みの處は羽織衿附と反對に小衿の方をつり加減にし、待針が終つたら下前堅衿先から縫ひ初め、地質によつて一針抜きか又は半返しに縫ふ。

折りを小衿の方へつけて吊り紐をつけ、小衿の裏を拵けつける。袖附の始め終りに抄ひ留をして袖附をし、次いで身八つ口を拵けつる。



組紐の結び方種々

大 五 飾り紐の附け方

上前に玉附の飾紐を下にしてつけ、額縁を中心としそのまわりは表に見えないやうに拵けつける。

下前も上前と同じ様にする。

内側は下前堅衿角に玉許りついた紐をつけ、上前小衿裏に向ひ合せに之をかける輪をつける。

腰は上前堅衿丈の二分の一よりも四糎上つた處に玉附の飾紐をつけ前身頃に、之と同じ高さの堅衿附から四糎離れた處に輪の紐をつける。裏紐は下前の堅衿端と上前脇の縫ひ込みとに腰紐よりもまた四糎上つた處に、巾二糎丈三十糎程の拵け紐をつける。

備考 一、本裁合羽の普通仕立上げ寸法を問ふ。

二、小衿の標附け方と縫ひ方を説明せよ。

第三章 腹合せ帯

● 普通仕立上げ寸法

巾 二八―三二糎

丈 三八〇―四一五糎

帯巾は時の流行によつても廣狹があり、又用ふる人の體格によつても廣狹を考へる必要がある、即ち丈の高い人は廣く、丈の低い人は狭くすると格好がよいものである。

腹合せ帯は別名を晝夜帯とも云つて、普通兩側異つた帯地を合せて仕立てるものである。

● 布の整理

どんな織方の帯でも仕立にかゝる前には必ず布の整理をすることが大切である。

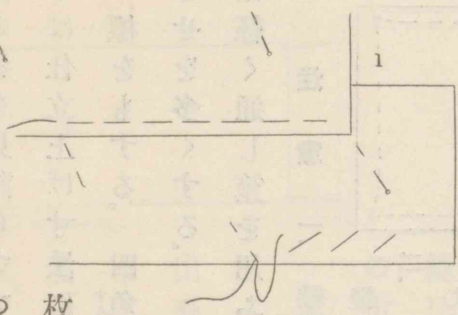
まづ帯の耳を合せ、織出しと織出しとを揃へて見て長短があつたならばその差をよく調べて、幾度も布目の正しく揃ふまで充分に直す。そして織耳がつれて居て、手で直らないものは、火熨斗か又は烙鋺で伸ばし、帯地の中央よりも、織耳を少し弛む加減にする。もし織耳のつれ方の甚だしい場合には、布の端に切り込みを入れて後、烙

鋺で伸ばす、兩耳を伸ばしたならば、帯地全體に火熨斗をかけて丁寧な布の地のしをする。こうして片側を直した上で、兩側を合せて見て同じ調子によく揃ふまで直す。

● 標附け方

布の整理を終へたならば、帯側の表を中にして二枚合せ、つり合を見、中央に四十糎おき位に待針を打ち、帯の兩側のつり合をよく檢べたならば次に縫

假寐のかけ方圖



ひ代の邊を見計らつて、圖のやうに躰糸で假とぢをする。
 帯巾は仕立上げ寸法に四耗を加へ、模様を加減を見計つて巾の標をつけ
 丈の標をもする。四角は更に二耗づゝ丈巾を廣く標をつけて出來上り
 のきせを多くする。
 標は軽く通し篋を用ふ。

注意

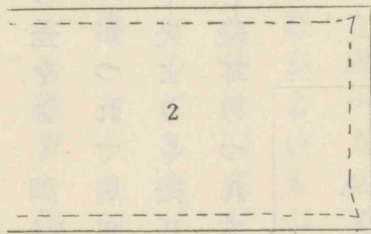
一、織出しは全部出さないで模様の加減を見計つて、適當に
 縫ひ込んでよい。

二、片側特別に長い時又織端の都合、模様の如何によつて
 は、手の方の六十糎位の處に、適當に揚をすることもある。

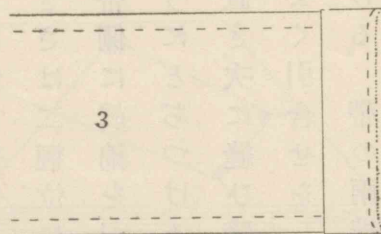
四 縫ひ方

兩端三十糎の間を細かく半返し縫ひに、他は一針抜
 きか又は抄ひ針にして、一方の中央を帶巾だけ残して
 全體縫ふ。兩端は半返し縫とす。

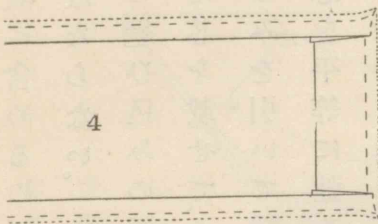
帶の角の縫ひ方圖



折り方圖(一)



折り方圖(二)



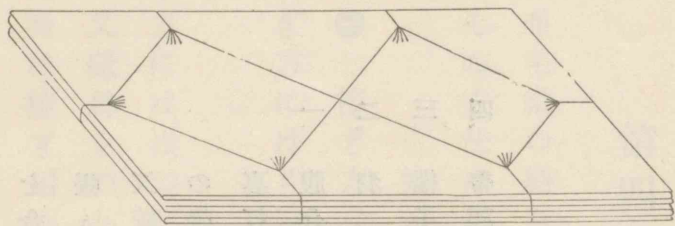
布の角はただ、眞直ぐに縫つたのでは鈍つて直角に引
 立たぬ故、圖のやうに二耗程突出して縫ふ。
折りのつけ方 先づ端に四耗のきせをかけて折り、
 縫ひ目にとぢつけ、次に豎に二耗のきせをかけて折り、
 角を整へてよくとぢつける。
 縫ひ込みがあまり厚くなるやうなら、物によつては角
 の折り込みを適宜に切り落してもよい。
芯の入れ方 芯布は裁つ前に全體に平に霧を吹き、
 アイロンをかけて地のしをして置く、完全に地のしの
 出來た芯布の一方の耳を裁ち切り、次に仕立上げの帶
 巾と同寸法に他の一方を裁ち切る。
 丈は凡そ帶丈四十糎について五耗の弛みを加へて置
 く。芯は概して地質の薄い方に含め、同じ厚みのもの

は表に含めるのである。故に折りをつける時もそのつもりで付けなければならぬ。
 帯の縫ひ込みの折返つた方を上にして長く伸して置き、その上に裁ち切つた芯を載せて、一方の端に芯を待針でとちつけて置き、他方の端から帯地のみを引いて靜かに離し、芯の弛みを定めて、八十糎おき位に待針を打ち、芯を平等に弛めて置く。

次に待針を縫ひ目の方に移して、芯を縫ひ込みにとちつける、その針目の大きさは二糎位にする。芯の一方をとちつけたならば芯を向ふに起して、帯側に眞綿を引き、次に再び芯を帯側の上に置いて、他の一方を捻れぬやうにとちつけ、その上に眞綿をひいて、四方に引糸をつけ角を先に返して置き、次に縫ひ残した處から表に返す。

よく引合せをして四方に躰をかけ、前に縫ひ残してをいた處を細かく締める。帯の兩端は端より五糎程離れた處に躰をかけ、又全體にも躰を

帯出來上りの圖



かける。

仕上げ 火熨斗を掛け、壓を置く。

飾りとち 六つ折りの屏風疊みにして、紅白の糸を二重にし、帯巾の中央に兩端から各々四糎の深さにとち、次に丈の兩端から各々四糎づゝ取り、その残りを四分して仕立上り圖のやうにして、二個所にとちをし、都合六個所とち終つたならば、糸を菱形にかけて置く。

注意

一、地薄のため、二枚芯を使ふ場合は、一枚を帯巾に裁ち、他の一枚を帯巾よりも縫ひ込みだけ狭く裁ち、二枚を合せて芯の中央をとちつけて、一枚芯と同じ様に入れる。

二、絹、紗等の薄物には二枚芯を用ふ、この場合の

二枚芯は二枚を帯巾に裁ち切り、縫ひ込みを芯の間に挟んでとちつけるのである。出上つて表に返す時は兩面いづれから見

ても縫ひ込みのすけて見えることはない。
三、帯側両方のつり合は地質によつて違ふ。例へば縮緬と縞子とを合せる場合は縮緬の伸び加減を見計らつて、縮緬の方を少し張り目にする。

又綾り類は綾りの妙味を損じない程度に火熨斗をかけて相當の帯巾に伸ばし、物によつては極くうすい新モス、又はガーゼで裏打ちをすることもある。

- 一、腹合せ帯の縫ひ方順序を述べよ。
- 二、羽二重と博多との合せ方について述べよ。
- 三、縞子と鹿の子綾りとの合せ方について注意すべきことを問ふ。
- 四、帯芯の地直しの仕方を問ふ。

第四章 絹布毛織の繕ひ方

絹布毛織の繕ひ方も綿布と同じやうに、接ぎ方、継ぎ方を含むものであつて、その方法は綿布と多少違ふので次に述べることにした。

第一 絹布の繕ひ方

● 接ぎ方

接ぎ方には片返し、割り接ぎ、掛け接ぎ、織り接ぎ、寄せ接ぎ等の種類がある。

接ぎ方には、ほつし絲か又は共色の菅絲を用ひ、時には生絲を使ふこともあり、又縫絲をつかつて差支へないものもある。

針は掛け接ぎ用の細いもの、即ちメリケンの十二番位が適當である。

一、片返し 綿布の場合と同じやうに、よく布目、縞目を合せ、躰で、二枚の布を押へておいて縫ふ。その針目はなるべく細かい方がよい。

二、割り接ぎ 綿布の場合に同じ。

その仕方は縫ひ目を割り、姫糊か、續飯つぎいひの淡くしたものを針尖につけて、裏から接ぎ目に引いて、表裏に烙鏝をかける。

三、掛け接ぎ 縫ひ方は綿布の場合に同じで、その仕上げ方は綿布の割り

接ぎに同じである。即ち、縫ひ目を割つて姫糊か、續飯つぎいひの淡くしたものを、裏から接ぎ目にひいて、表裏に烙鏝をかけるのである。

縮緬類は特別であつて、同じ掛け接ぎと云つても、その方法が少し違ふ。先づ布目や縞目に注意して、接ぎ代を折り、次に西の内か又は厚美濃類を縦に二糎の中に裁ち切つて、之を接ぎ代の折り目の間にはさんで鏝をかける。

両方の折り山を正しく合せて鏝をかけて、經絲たて凡そ二本おき位に、緯絲よこ一本を抄つて、五本ごとに一針づゝスカラ掛けにして、全體出來上つたら、紙を取り捨て、割り接ぎのやうにして仕上げる。

四、織り接ぎ

裏にも接ぎ目のあらはれないやうに接ぐ仕方であつて、まづ一方の布の端を十糎位ほつしておいて、両方の縞目や布目をよく合せて一糎位重ねて鏝をかけ、ほつした糸を一本づゝ針に通して、他方の布の緯糸を抄つて、織地の通り二糎位刺して行つて、糸を引き締め、よく接ぎ目を合せる。これが全體すんだら糸や布の餘りを切つて捨て、烙鏝をかけて仕上げる。

五、寄せ接ぎ

この接ぎ方は、一般に使ふことはないけれども、縮緬類の衿肩明の裂けた場合とか、大人物を子供物に直す時等に施す方法である。その仕方は先づ、接ぎ目のほつれは、綺麗に切り取つて置いて、布目と縞目によく注意して裁ち目を突き合せ、双方にも裏から一糎程の深さに織地を刺して、接ぎ合せ烙鏝をかけて仕上げる。

● 継ぎ方

継ぎ方には、色紙継ぎ、刺し継ぎ、穴継ぎ等の種類がある。継ぐには、ほつ

し糸か、又は共色の糸を使い、針は継ぎ針を用ふ。

一、色紙継ぎ 綿布の場合と大體同じであるが、針目は二目落しか、三目落しにして、極く細かくすること等が綿布の仕方と違つて居る。

二、刺し継ぎ これは綿布と同じである。地が弱つても色紙継ぎにする程のこともない時には布をあてないで色紙継ぎと同じ要領で刺しておく。

三、穴継ぎ 損所を圓形か方形に切り去り、圓形ならばまはりに、方形ならば四角に切り込みを入れ、裏へ縫ひ代を折り返して烙鏝をかける、共布を裏に當てよく布目や縞目を合せて、躡て押へて置いて細かくまつりつける。全部まつりつけたら継ぎ布の廻りにも切り込みを入れて、縫ひ目に濕りをおいて烙鏝をかけて仕上げる。

第二 毛織の繕ひ方

こゝでは主として毛織類中の地厚の物について述べる。メリンスの

やうな地薄の物は、綿布か絹布のやうにする。糸針の注意は、絹布の場合と同じである。しかし解糸ほつしとは使はない。

一、突き合せ接ぎ 地厚の毛織物の継ぎ方は全部この方法である。その仕方は先づ接ぐ布の兩端を平に切り揃へ、毛並縞目等に注意してよく裁ち目を突き合せ、兩方とも二糎位の深さに織地の中を抄つて、接ぎ目の處のみ表に出して細かに刺す。烙鏝をかけ刷毛で毛並を整へて仕上げる。

二、色紙継ぎ これもなるべく針目の表に出ない様に布地の間を抄つてする。

三、穴継ぎ 先づ継ぐべき穴と布を四角とか、圓形とか、それぞれよく合ふやうに裁ち、裁ち目を合せてよくはめこんで動かぬやうに躡て押へ、次に突き合せ接ぎと同じ仕方でつぐ。

第五章 本裁女物綿入

① 普通仕立上げ寸法

袖口衿 四耗

裾 衿 七耗—一糶

その他は本裁女物衿に同じ。

② 裁ち方と積り方

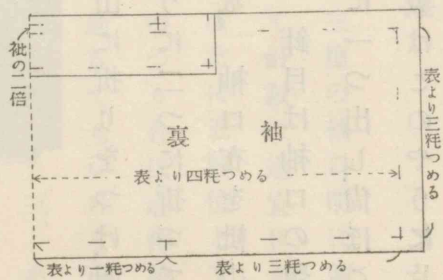
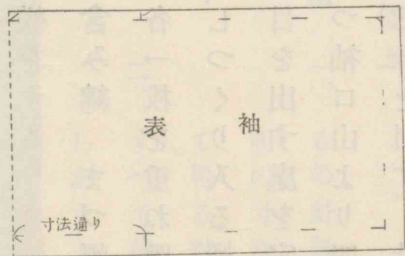
表用布の裁ち方は本裁女物単衣に同じで胴裏用布と裾廻し布の裁ち方は本裁女物衿に同じである。

③ 標付け方

一、袖 表袖の付け方は本裁女物衿の通りで、裏袖の付け方も大體同じであるが、袖口の方で、表よりも衿の二倍だけ縫ひ代を廣くし、袖巾は附より下で少しつめなければならぬ。

袖口明は表より二耗つめ、袖附は一耗八つ口では丈を三耗つめる。

袖の標付け方圖



尤もこれは地質によつて寸法をかへなければならぬことは勿論である。

二、身頃 表裏とも衿に同じ。

但し後巾も前巾も表より二耗つめる。

三、衿衿 衿に同じ。

縫ひ方順序

- 一、袖。二、袖口含み綿。三、身頃。四、袖附。五、綿入。六、紵け方留め方。
- 七、縦とぢ、裾とぢ。
- 一、袖 裏袖に袖口布をかけ、表袖裏袖を別々に縫つて丸みを作り、表裏の八つ口を合せて縫ひ、平烙鏝を當て、裏に含み綿をして引返し、きせをか

けて躰をする。

二、袖口含み綿 まづ軽く襷山に折りをつけ、四種位の中綿と二種位の綿を各一枚を重ね、圖のやうに二つに折つて、折り山が布の折り山に正しく、しつくり入る様にする。袖口布を襷山から折つて綿の上に被せて針目を出す處を定める。針目は袖口の留めに一つ、それより二種位に一つ、袖口山より四耗下に一つ出し、尙ほこの間を圖のやうに四等分して三針を出す。針目の數はこのやうに片方に六針とし、これは出來上つて後も袖口布に出て居るものである。

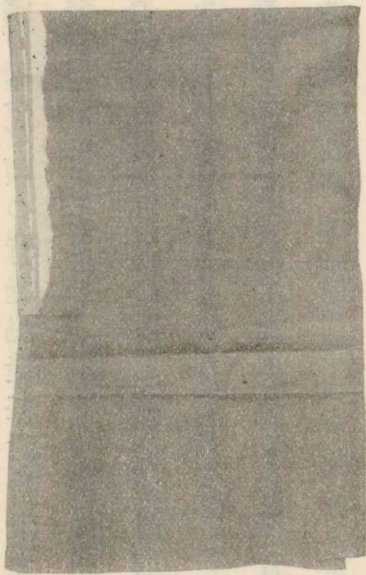
實際はよく綿を含めるため、この四等分した間にも綿だけを抄ふ針を四針使ふ。

注意 一、この針數は二十三種位の袖口明に適當したものであるから、袖口明の寸法によつて針數は適宜にかへねばならぬ。即ち裏に出て居る針目の間は常に五種位とす。

二、すべて綿と布とのつり合は心持、綿がゆるむやうにする。しかしあまりゆるみ過ぎてもいけない。

三、糸のひき加減も極く大切なことで、やはりゆるくして置く、つれるとその糸の通り出來上りがびり／＼縮んで見苦しい。しかしゆるみ過ぎるとしまらなくなる。

袖口含み綿の圖



三、身頃 表身頃の背縫脇縫、衿附、衿附まで單衣物のやうにし折りをつけ。要所には躰をかける。脇縫は斜に開いて躰で押へておく。裏身頃の胴接ぎをし隠し躰をかけ、表身頃と同じやうに衿附まで縫ひ、折りをつけ要所には躰をかける。表身頃と裏身頃の丈比べをして裾合せをし、袷をあげて衿にだけ隠し、躰をする。

身八つ口を袷のやうに留めて、兩方とも縫ひ、含み綿をする。

四、袖附 袖附の留め方や、付け方は袷の通りであるからこゝでは説明を省く。

五、綿の入れ方 次に綿を入れる。表裏とも裏返して、脇縫の處から折つて前身頃を中に入れる、つまり表後身頃が上に、裏後身頃が下にその中間に左右の表裏の前身頃が入つたわけである。袖も無理のないやうに表裏を重ねる。

まづ眞綿をつれないやうにひいて、その上に綿をのべる。この時肩から上に二十糎位出し、裾の方は七糎位長くして置く。なほ兩脇にも綿巾の都合のよい様にのべて置き、衾綿を二枚位重ね、裾の總巾よりも四糎位長い丈の綿を二つ折りにして作る。衾綿を衾山に入れて身頃から、つゞいてゐる綿を被せ、袖の方は、袖口留の一糎位下から横に切り目を入れて、八つ口の處まで切り、含み綿のある身八つ口の處は綿を切り取つて袖口より下の綿は前身頃の分とし、上の綿は袖口の含み綿とすれすれに巾を切つて置き、肩山と兩脇は、表身頃と裏身頃との間に程よく折り込む。その上に眞綿をひいて、兩手を肩の方から、表裏の間に入れて、兩脇の裾を綿と布を共に持つて肩から引き返す、而して前身頃の裏が上に出る様に置き、袖前身頃に綿を入れて、衿下は二糎巾を廣く入れる。片身頃づゝこのやうにして兩方共綿を入れる。

六、衿け方

裾によく綿を含め、假とちをして衿の中とちをし、次に袂先を三糎程縫ひ、綿をよく含め、裏衿の衿下に含み綿をする。この場合は衿先の處に一針、その上下に一針づゝ針目を出して綿を押へる。

衿の裏表を合せて中とちをし、衿先の留をし、衿先を縫ひ、衿の綿を平にして表衿に含めて、衿巾の寸法に折り、裏衿は表衿巾より五糎控へて折つて合せ、躰をかけて衿下衿と衿衿とをする。

次に袖口を衿ける。まづ表袖の袖口を裏返して裏の端まで、身頃からつゞいて居る綿を平に直し、もし長い場合は餘分の綿を切り、その上に表袖口を被せて、よく山を合せ、寸法通りに衿を出して袖口の留をする。
留め方 表の内袖の縫ひ込みの間から、きせ山より心持内方へ針を出し、次に表の外袖の同じ位置の處へ針を入れて、外の裏袖へ通し、それから内袖の裏を縦に抄つて、その縦に抄つただけ離して、今通した反對に裏の外袖から、表の外袖、表の内袖と糸がねぢれぬ様に通して始めの糸

と、しつかり結び合せて撚り、その糸で衿ける。

衿を定めて躰をかけ、袖口下八糎位の處を懸針にかけて留より二糎位の間は、少し表をつり加減にして丸みをつけ、それより上は平な調子にして表のきせ山から二糎奥を五糎位の針目で衿ける。

七、縦とちと裾とち 出來上つた外側から裏を見て、表と裏の縫ひ目をよく合せ、縫ひ目の間から針を入れて、下になつて居る表の縫ひ込みを抄ひ、その針を又裏の縫ひ目の間に出して、脊縫も脇縫も裾より上までとぢる。

裾とちは女物衿と同様であるが、衿に綿が入つて居るからその綿が衿の中へ充分入る様に針の尖でつゝき出し、綿は指先で揉み等してよく綿を殺してとぢる。この時とち糸がつれると衿が見苦しくなるから糸のつれぬ様にしなければならぬ。

備考 一、袖口はどうしたら美しく衿け上げることが出来るか。

- 二、裏の縫ひ方について袷と違ふ處を述べよ。
- 三、綿の入れ方を問ふ。

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 二、裏の縫ひ方について袷と違ふ處を述べよ。 and 三、綿の入れ方を問ふ。）

第六章 本裁男物袷羽織

① 普通仕立上げ寸法

袖丈	着物と同寸	前巾	一九糎
袖口	着物と同寸	衿巾	七糎五耗
袖附	總附にする	襠巾	七糎五耗
袖巾	着物と同寸	衿肩明	着物より一糎増し
身丈	着丈の四分の三に	前下り	三糎五耗
	四糎を加へる	乳下り	脊より四五糎内外
	普通一米五糎内外	衿	着物と同寸
後巾	着物と同寸	繰越し	五耗

② 裁ち方と積り方

裁ち方と積り方は女物に大體同じであるが、袖丈が短かく、又肩の繰越

しが女物より一般に少いから、衿丈を積る時注意して積らなければなら
ない。

裏布もその割合で少くなるわけであるが、あまり胴裏の短いのは格好が
悪いから、乳下りより少し下まではつける方がよい。

③ 標付け方

一、袖 標付け方圖に示したやうに、袖附の標は別につけなくて袖丈いつ
ばいにして置く。その他は女物と變りがない。

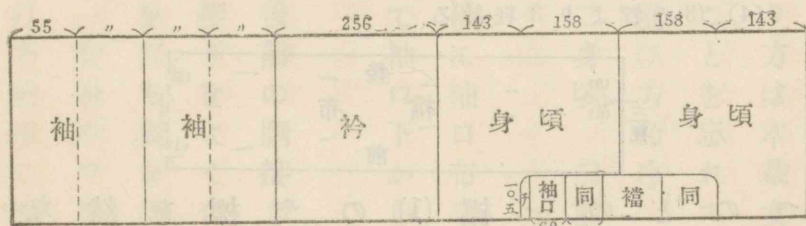
二、身頃 表布と裏布とを重ねて置くことは女物の通りである。

標をつけるにも、寸法が女物と變つて居るだけで大差はない。なほ女
物のやうに身八つ口が明いてゐないから、身八つ口の標付けの必要が
ない。

三、襠 これも女物に大體同じであるが、男物は上の襠巾は袖附の處で後
身頃と前身頃とが突き合せになつて居て、襠巾が自然に消えるやうに

男袴羽織の裁ち方

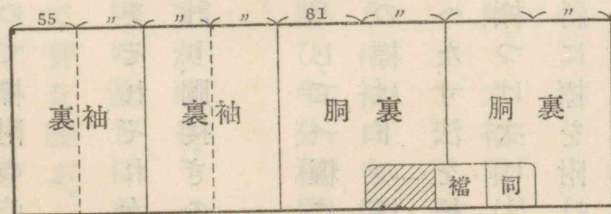
表用布 並巾 10米78種



積り方

公式 $\{ \text{總用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿用布} + \text{前後の差} \times 2) \} \div 6 = \text{後丈}$
後丈 + 前後の差 = 前丈
(出來上り身丈 + 衿肩明 + 前下り + 衿先縫ひ代 + 繰越し
 $\times 2) \times 2 = \text{衿用布}$

羽織裏の裁ち方

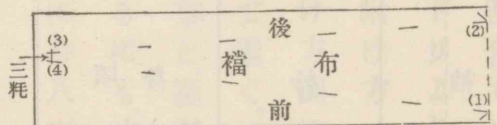


積り方

公式 $\text{袖丈} \times 4 + (\text{出來上り身丈} \times 2 - \text{後丈} + \text{胴接ぎ代}) \times 4 =$
裏總用布

襠の標付け方圖

- (1) 縫ひ代 1 糎 (2) 下の襠巾
- (3) 下の襠巾 ÷ 3 + 後裾の縫ひ代 = 後上部の縫ひ代
- (4) (3)の標より 3 糎計る



然し、襠附にきせがかゝるので標附の時は、上の襠巾を三糎にして標をつける。
 標をつけるには、まづ表裏をそれぞれ女物の場合のやうに重ねて置き、襠丈を計り、胴接ぎの標をして圖のやうに置く。
 (1)の標を前襠附の縫ひ代として一糎に標つけ、(2)の標を襠巾を計つて標し、(3)の標は下の襠巾の三分の一に後襠附の縫ひ代を加へた寸法を標す。次に(4)の標を(3)の標より三糎に標つけ、次に(1)と(4)、(2)と(3)との標の間にも、それぞれ斜に標を付け、而して三分の一の斜になつた方を後襠附とし、三分の二斜になつた方を前襠附にする。

袴の折り方は本裁女物袴羽織の章で述べた通りである。特に合標をつけることを忘れてはならない。

⑤ 縫ひ方順序

- 一、袖。 二、身頃。 三、前下り。 四、後襠附。 五、衿附。 六、袖附。 七、袖附の留め方。

一、袖 裏袖に袖口布をかけ、男物袴の袖口のやうに袖口を縫ひ合せ、四つ留をして、袖口下から袖下の巾の中途までを縫ひ、半分程縫ひ残して置く。

二、身頃 後前の胴接ぎをして裏へ折り、隠し躰をかける。

後の胴接ぎをよく合せて脊縫に針を打ち、衿肩の裁ち目を表裏四枚揃へて針を打ち、表を見て、標通り四つ縫ひにして脊を縫ふ。

三、前下り 女物のやうに表は標通りに、裏は標より四糎控へた處と合せて針を打ち、前巾の標の處まで縫つて裏側へ折り、隠し躰をかける。

四、後襟附 襟の上部を丈の標から表も裏も縫ひ込みを内側へ折り、けぬき合せにして標をよく揃へて待針を打ち、襟の中央を假寐で押へ、先づ後襟を後身頃の中に挟んで裾の處に針を打ち、更に袖附の標とをよく合せて針を打ち、その間にも二三箇所針を打つて、一針抜きに縫ひ、平烙鋺を縫ひ目に當て、表側へ折り、表に返して更にきせを正す、こうして左右の襟をつける。

五、衿附 衿附は鐵砲附け、又は袋附けといひ、一度につけて、裏で紘けなくともよい。

まづ、衿肩廻しから前身頃の衿先まで、表と裏の裁ち目をよく揃へ、衿附の廻りを七耗の深さに假とぢをしておく。
左右の乳をつくつて乳下りに縫ひつける。

次いで身頃の衿附の標と衿縫ひ代とを合せて針を打ち、全體に待針が打てたら、まづ、上前の衿先から順に身頃を衿の中に疊み込むやうにし、
て衿で身頃を包み、合標を合せて針を打ち直す。衿附の調子は女物衿羽織に同じ。

全體針を打ち直したら懸針にかけ、上前の衿先から縫ひ始め、全體は一針抜きにして、糸がつれぬやうにし、乳の處と衿先十厘位とは返し針に縫ひ、衿肩の處で一針返して留める。それより三つ衿の間は衿の裏を離して表と身頃のみを縫ひ、下前の方も上前と同じやうにして衿をつける。

左右の衿附が出来たら、縫ひ目に平烙鋺を當て、表衿即ち芯の入つて居る方に三耗のきせをかけて折りをつけ、次に左右の衿先を縫ふ。即ち衿附の終りから一厘先の處を縫ひ、縫ひ込みを折つて少し引き上げるやうにして表衿附にとぢつける。

これが左右出来たら、三つ衿の開いてゐる處からなるべく皺の出来ないやうにして、前身頃を引き出して衿を表返し、衿先を正して三つ衿の

處を細かく紘ける、衿に躰をかける。

六、袖附 袖附は前襷をつけない前に表も裏もつけるのである。

先づ、表袖を普通につける、この際附始めと附終り、即ち襷の際の處を前袖附、後袖附共、四耗づゝ縫ひ残す、裏袖附は折りが表と反對になるやうに縫ひ、折りをつける。そして前袖附の方は附始めから八糶だけ縫つたら、二十三糶ほどあけて置き、そこから又後袖附の終りまでを縫ふ。この際袖附の始めと、終りとを四耗づゝ縫ひ残すことは表袖附の通りである。

七、袖附の留め方 兩方の袖をつけたら留をする。先づ袖附の襷の際を持ち、表の後袖附の處へ表の前袖附を中表にして重ね、次に裏の後袖附の處に裏の前袖附を中表に重ね合すと、表前袖附表後袖附裏後袖附裏前袖附といふ順に重なる。これを二本の絲を持つて留めるのである。留め方は今重ねた順序の通り、表前袖附の處を手前にして、次のやうに

針を通す、表身頃、表袖、表身頃、裏袖、裏身頃、裏袖、この順序にして身頃は襷の極く際を、袖は二耗のゆるみをとつて、折り山の際を留める。これを八つ留といふ。こうして堅く結び、針についてゐる一本の絲をのこし、残り三本の絲を撚り合せ、残した一本の絲で袖下の残りを縫ふ。この時、裏袖の縫ひ込みを三角に折り、折り合のよくなるやうにする。

前襷は前身頃で挟んで四つ縫にしてつける。

右のやうにして縫ひ終つたら裏の前袖附の残りを紘けて仕上げをす

す。

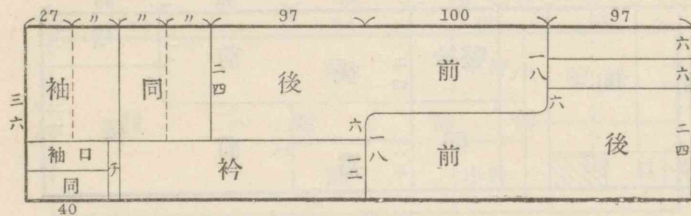
備考

- 一、本裁男袷羽織の襷の付け方を述べよ。
- 二、本裁男袷羽織の衿の付け方を述べよ。
- 三、本裁男袷羽織の袖附の留め方を問ふ。

三つ身羽織の裁ち方 (筒袖)

但し両面物

用布並巾 3 米 99 糎. 前後の差 3 糎



積り方

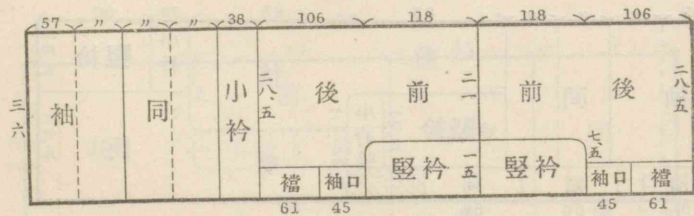
公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{後丈} \times 3 + \text{前後の差} = \text{總用布}$$

$$\{\text{總用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{前後の差})\} \div 3 = \text{後丈}$$

四つ身被布の裁ち方 (長袖)

用布並巾 7 米 14 糎. 前後の差 12 糎



積り方

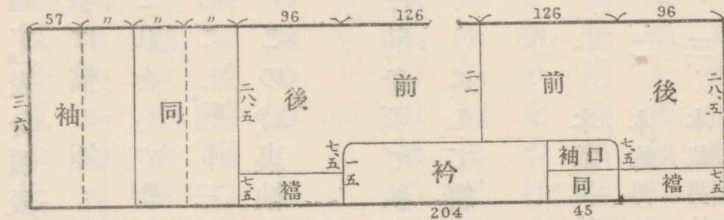
公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{後丈} \times 4 + \text{小衿丈} + \text{前後の差} \times 2 = \text{總用布}$$

$$\{\text{總用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{小衿丈} + \text{前後の差} \times 2)\} \div 4 = \text{後丈}$$

四つ身羽織の裁ち方 (長袖)

用布並巾 6 米 72 糎. 前後の差 30 糎



積り方

公式

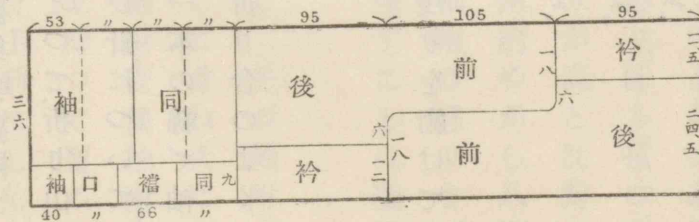
$$(\text{袖丈} + \text{後丈}) \times 4 + \text{前後の差} \times 2 = \text{總用布}$$

$$\{\text{總用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{前後の差} \times 2)\} \div 4 = \text{後丈}$$

三つ身羽織の裁ち方 (長袖)

但し両面物

用布並巾 5 米 7 糎. 前後の差 10 糎



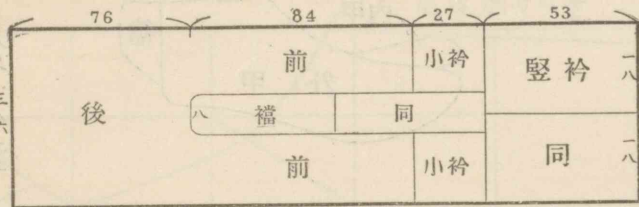
積り方

公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{後丈} \times 3 + \text{前後の差} = \text{總用布}$$

$$\{\text{總用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{前後の差})\} \div 3 = \text{後丈}$$

一つ身袖無し被布の裁ち方
用布並巾 2 米 40 糎. 前後の差 8 糎



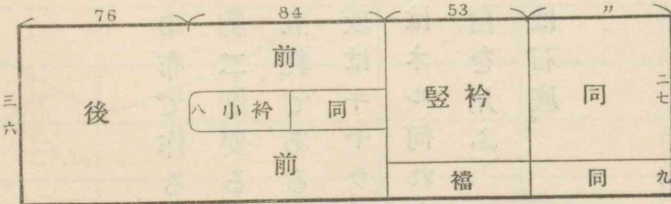
積り方

公式

$$\text{後丈} \times 2 + \text{前後の差} + \text{小衿丈} + \text{縦衿丈} = \text{總用布}$$

$$\{\text{總用布} - (\text{小衿丈} + \text{縦衿丈} + \text{前後の差})\} \div 2 = \text{後丈}$$

一つ身袖無し被布の裁ち方
用布並巾 2 米 66 糎. 前後の差 8 糎



積り方

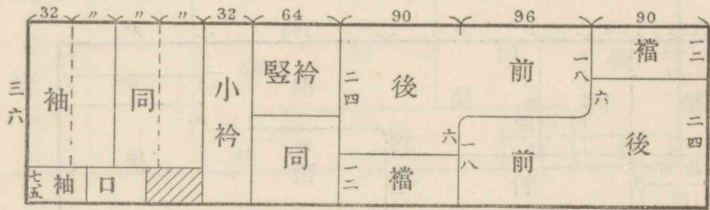
公式

$$\text{後丈} \times 2 + \text{前後の差} + \text{縦衿丈} \times 2 = \text{總用布}$$

$$\{\text{總用布} - (\text{縦衿丈} \times 2 + \text{前後の差})\} \div 2 = \text{後丈}$$

三つ身被布の裁ち方 (元祿袖)

用布並巾 5 米. 前後の差 6 糎



積り方

公式

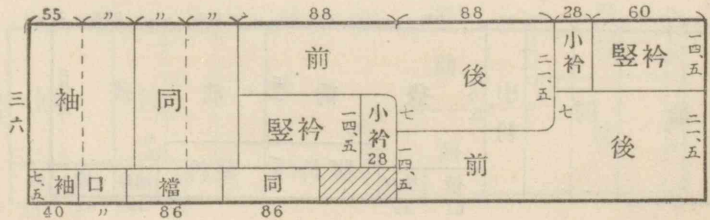
$$\text{袖丈} \times 4 + \text{小衿丈} + \text{縦衿丈} + \text{後丈} \times 3 + \text{前後の差} = \text{總用布}$$

$$\{\text{總用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{小衿丈} + \text{縦衿丈} + \text{前後の差})\} \div 3 = \text{後丈}$$

三つ身被布の裁ち方 (長袖)

但し片面物

用布並巾 4 米 84 糎. 前後の差なし



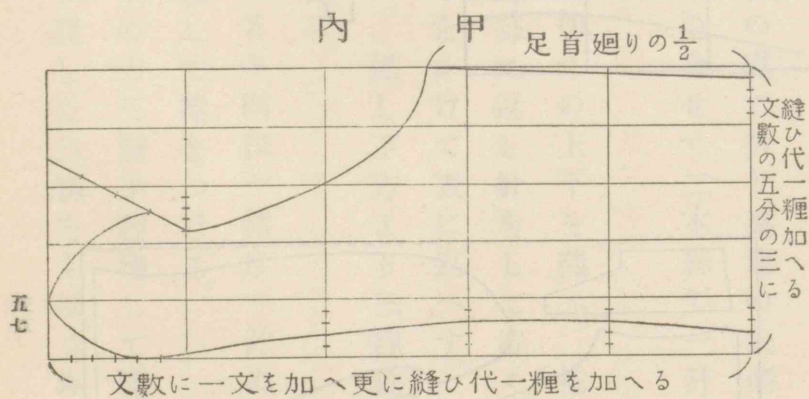
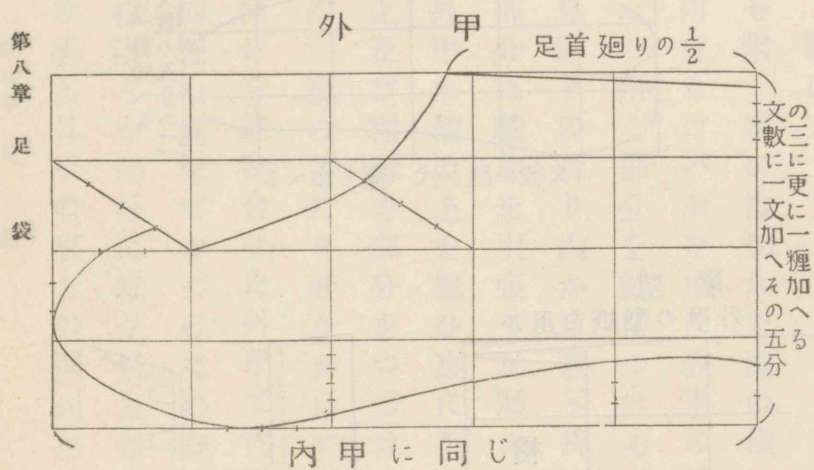
積り方

公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{後丈} \times 3 = \text{總用布}$$

$$(\text{總用布} - \text{袖丈} \times 4) \div 3 = \text{後丈}$$

割出し及び型のとり方



出来上りの圖



第八章 足袋

第八章 足袋

裁ち方

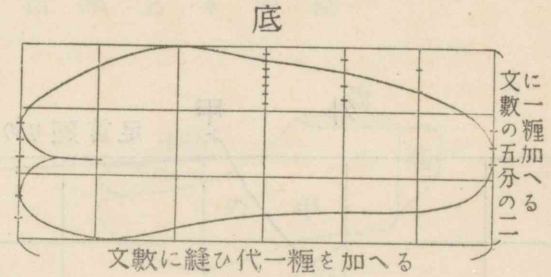
用布の丈 並巾布で作る時はその足袋の文敷の約二倍要る。但し一文は凡そ二糶五耗である。

表地 白木綿或はキヤラコ。

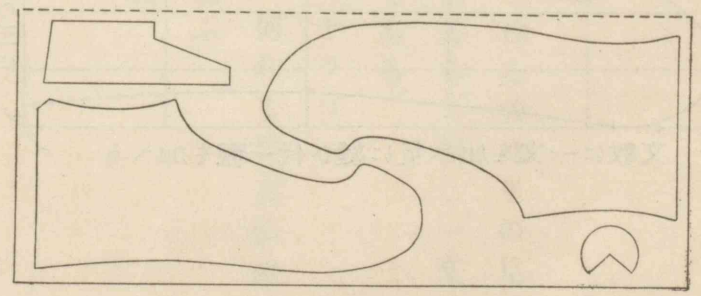
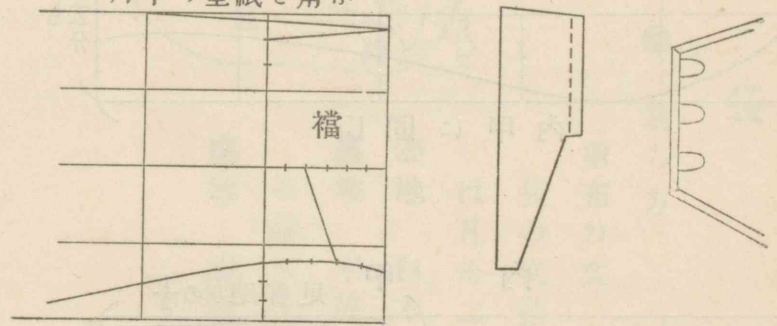
裏地 木綿又はネル何れも白(表が紺の時裏は白を用ふ)

底地 雲齋又は石底。

裁ち方



襠型 外甲の型紙を用ふ



縫ひ方

一、コハゼ附 裏の襠切れを圖の様に點線の處で折り、裏地の表側にコハゼを附けるコハゼを中に表裏の襠切れを合せて二本糸で一針抜きにコハゼの附く部分を縫ひつける。

表を見返りの折り山から裏へ折つて襠切れの上下を縫ふ。襠切れ下斜の部分は縫糸を引張り加減に四五針毎に返し針をして置く。

二、甲 外甲の筒の上を縫ひ、裏に折り、きせをかけて表に返す。内甲の筒の上及び襠附の部分をつづけて縫ふ。但し下方より三糎位縫ひ残し置く。裏の方にきせをかけて表に返す。

裏表筒口を縫ひ合せた外甲で内甲をはさみ、四枚一緒に一針ぬきに甲から鈎型の處までつづけて縫ひ、表に返して襠をつける。

外の襠付きの部分に襠全體をはさみ、下の方三糎半程残して縫ひ、ここに襠の裏と外甲の裏との間、内甲の縫ひ残した三糎をもはさみ六枚一

緒に縫ふ。この時は襠布を少しゆるめて外甲の襠附の部分を張り加減にする。

三、底附 甲の底につく部分の周囲を躡糸でおさへて置く。次に底地に甲切れを合はせて踵及び爪先きの内外の切り込みの處を一針通して止めて置く。踵の方は稍甲布を張り目にし、爪先きの方は甲布を縫ひ縮めてギヤダを取り乍ら一針ぬきに甲と底とを撚り糸で縫ひ合せる。

この時五・六針毎にその針で縁を巻き縫ひにする。
四、掛糸 表に返して形を整へ、足首に合せてコハゼの掛け糸をつける。掛け糸は少しふとめの撚り糸を用ふ。

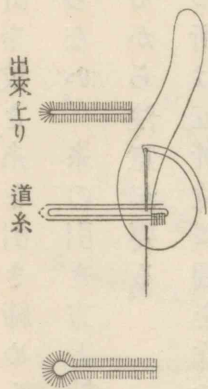
第九章 ミシン使用法

一、ミシン裁縫に必要な手縫
半返し・本返し・千鳥掛・まつり紵等で、その方法は前に基礎的技術の章で述べて置いた通りである。

二、穴かゞり

布の動かないやうに躡て押へて置き、布目の曲らないやうに注意して鑿か、又は缺で穴をあけ、右手前の角から順次にかゞつてゆく。糸は四十番か又は三十番のカタン糸を使ふ。地質によつては穴糸、絹糸等をも用ふ。まづ裁ち目に、道糸を少しつり加減に渡して芯にする。次に道糸の端から針を上へ半ば抜き出し、そのまま、抜かずに、針先へ針穴についてゐる方の糸を手前から向ふへかけ

穴かゞりの圖



て針を抜き、糸を引き締める。この引締め方は布と垂直に引かなければならない。糸の引き方と針足の揃へ方とで穴かゞりは美しくも醜くもなるから注意が要る。

端の所は五針位に圓を作つてかゞり、順次終りに近づく。全く終つたならば端に門留をする。

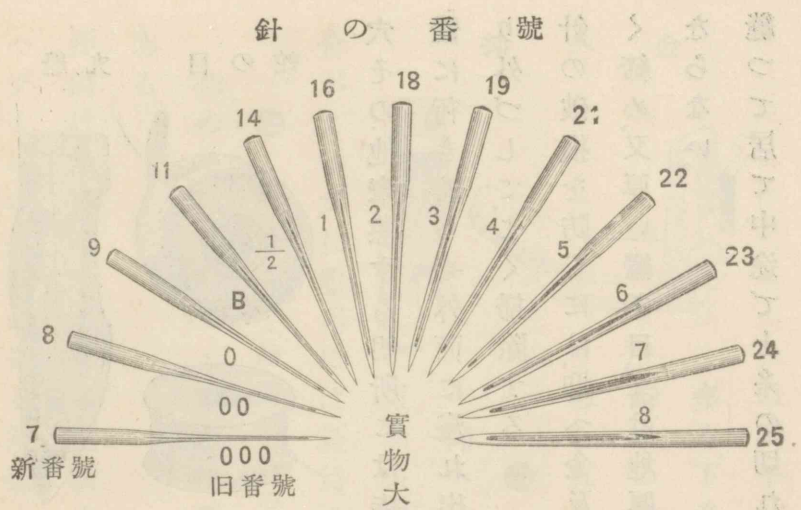
丸穴も同じ要領である。

③ 針と糸

針と糸との関係は極く大切なことで布の厚薄・硬軟等でそれぞれその地質に応じて適當のものを選ばなければならない。

針は普通は二分の一番かB番を用ひ、糸はカタン糸六十番を使用する。けれども地質の薄いものには、針は零番を用ひ、糸は七十番八十番を使用する。

又絹布には羽二重糸を用ふ、その時針は0番又は00番を使用する。

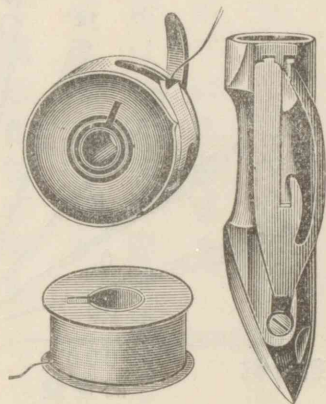


④ 糸の調子

上糸と下糸とが布の中心で結び合つて、上糸と下糸の緊張の力がよく調和すれば、縫ひ目は表裏とも美しく整ふものである。概していへば上糸よりも下糸が少し張り加減の方がよい、下糸が弛んだり又は上糸があまり弛むのは見苦しいからよく螺子を加減して用ふ。

下糸には丸舟型と蛇の目型との二種あるが丸舟型は糸の捲いてある管が長い爲縫ふに従つて下糸の解ける調子が平等にゆきにくい、蛇の目型はそんな缺點がないからどんな布にでも奇麗に縫へる。

丸船 蛇の目



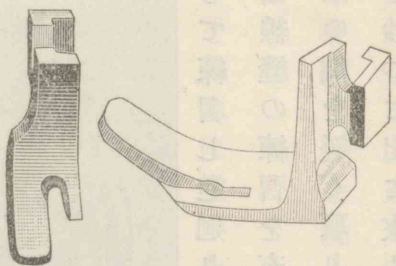
⑤ 使用についての諸注意

ミシンを使用する前には、まづ各部の塵を拂ひ、針糸を揃へ、針目の大小、上糸、下糸の調子等を調べて後使用する。使用後には又各部の塵を拂ひ、油布巾で器械の要部を拭つて置く。滑り板の下に當つた各部の穴その他摩擦する個所には時々油を注ぎ、數十回迅速に廻轉して油を全體に行き渡らせ、外面に溢れ出たものをよく拭ひ取る。又機械を時々取り外づして、よく掃除する。

針の破損を防ぐには、抑へ金及びその他附屬具の螺子に注意して常に堅く締め、又厚い継ぎ目、又は地厚の布等は相當に太い針を使用しなければならぬ。

縫つて居て途中で上糸の切れるのは大概機械に糸の掛け違ひか、又は糸

抑へ金



の調子があまり強過ぎる等が原因してゐることが多く、下糸の切れるのは下糸の巻き方の正しくない時、糸の通し違ひの時、又は調節の螺子の餘り強く締められた時等である。

⑥ 抑へ金

抑へ金には小型のものと長目のものとある。洋服類の如く針目を細かくする時は、小型のものが工合がよいが和服用には長目のものがよい。

⑦ 縫ひ方 (練習と糸の仕末)

初めに先づハヅミ車の廻轉と足の踏み工合を充分に練習する必要がある。

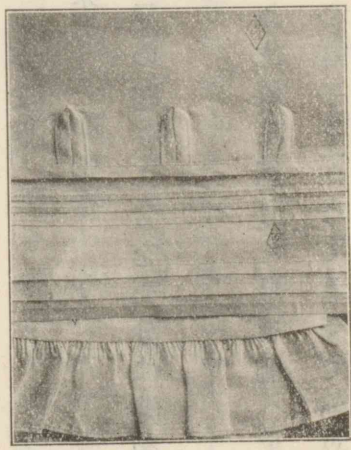
腰掛けるには、眼が針の正面に向ふ位置に正しく足を揃へて踏板に乗せ、ハヅミ車の外側にある運動止めの螺子をかけて、右手でハヅミ車を手前

ミシンの掛け方の姿勢



返して練習し、逆廻りせぬやうに注意する。次に針を用ひて紙に直線縫と曲線縫の練習を充分し、最後に糸をかけて縫ひ方の練習をする、左手で上糸の端を緩く取り、右手でハヅミ車を徐々に廻すと針が下り、そして下糸を抄つて出て来る。

ミシン練習縫



に依り、その運動につれて趾先と踵で交互に踏板を動かし、足のみの働きてハヅミ車を圓滑に廻轉することが出来るまで繰りに依り、その運動につれて趾先と踵で交互に踏板は上下に運動する

この時上下の糸を向ふへ引出して、針を上方へ上げて置いて、縫ひ床の上に布を置き、針を縫ふ位置に下してから、抑へ金を静かに下して縫ひ方を

する。右手を向ふに左手を手前に置いて、右手で布を軽く向ふへ引き、左手で縫ひ目の真直ぐになるやう正しく布をおしやる心持ちで布を扱ふ。縫ひ終りの時には天秤を極點まで上げて、必ず上糸と下糸とを共に摘んで糸切に當て、切る。

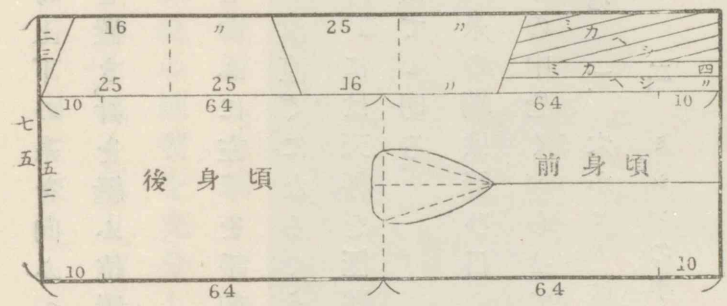
縫つた糸の端は縫ひ目の中に入るものは、一方へ引き出して針に通し、二三回布の中をくゞらせてそのまま切る。

備考 一、穴かどりはいかにしたら美事に出来るか。

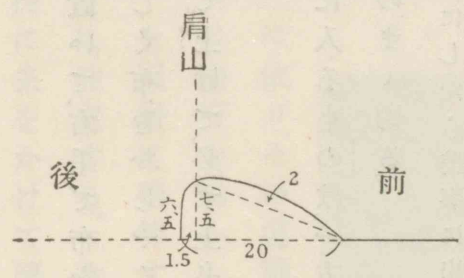
二、ミシンの手入の仕方を問ふ。

第十章 婦人シャツ

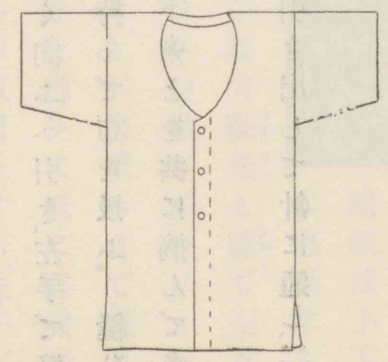
婦人シャツの裁ち方
用布大巾 長さ1米28糎



胸の割り方



婦人シャツ出来上りの圖



① 裁ち方

大巾用布をまづ身頃の中五十二糎袖巾二十三糎に切り離し、次に身頃の中を二つ折りにし、一糎五糎の操越しをつけ、衿肩明七糎五糎、内丸み一糎五糎、前明二十糎に標し衿肩明から前明の二十糎の處まで斜に標をつけ、斜線の中央で二糎の丸みをつけて標を付け、標通り胸割りをし、前身頃を下まで裁ち切る。

袖も圖の如く標をつけて裁ち違ひとし、残りから四糎巾の眞直ぐの見返しを二本と、斜の見返し二・三本とを取る。

② 縫ひ方順序

一、前明 前明に表から見返しを一糎の縫ひ代で縫ひ、けぬき合せにひて裏へ折り返し、奥の方も四糎程中へ折り伏せて兩側にミシンをかける。

二、胸割り 斜の見返しを衿肩明の表から胸割りをのばさないやうに七糎位の縫ひ代で縫ひ、裏へ返して八糎の出来上りにしてミシンをかける。

三袖附 袖は縫ひ代を一糶五耗、身頃は八耗の縫ひ代にして合せ、ミシンをかけ、折りを身頃につけ袖の縫ひ代で包み、表から飾りミシンをかける。

四居袖口の仕末 裾から十糶の切り込みの處から袖口までつゞけて脇と袖下を縫ひ、後身頃の方へ折りを返して前身頃の縫ひ代で包み、ミシンをかけ、馬乗りと裾は三つ折りにして表からミシンをかける。

袖口も三つ折りにしてミシンをかける、又袖口と衿の處へ好みによつて細いレースをつけてもよい。

五、釦附穴かゞり 釦穴は三つ、上前見返し中の中央に横に一糶五耗の大きさの穴をあけてかがり、釦はそれに合せて下前に三つ附ける。

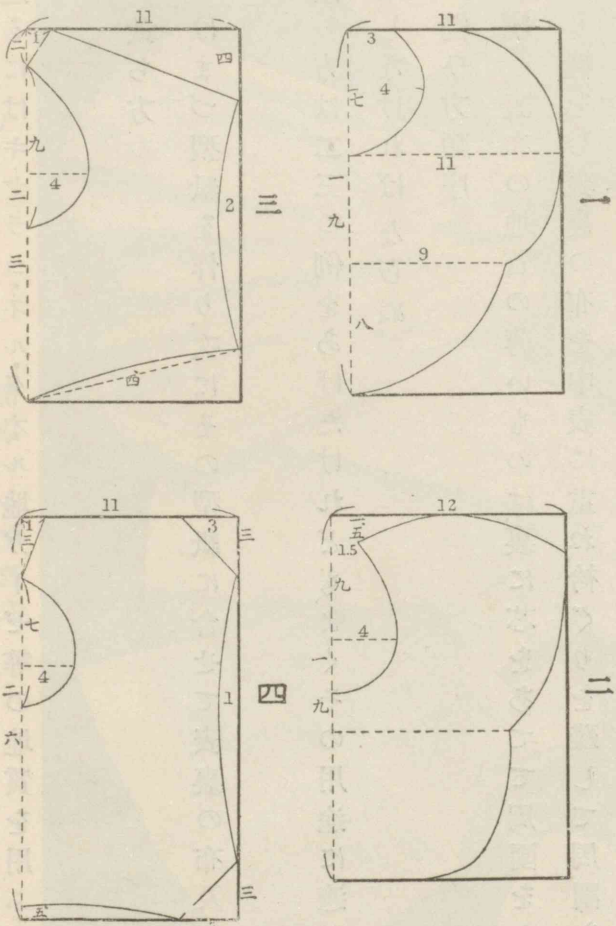
注意 地質の厚い物は袖下、脇等三つ折りにした處を二つ折りにしてミシンをかけるのみでよい。

大巾用車着まごころの巾五十二釐、巾二十三釐、袖口幅五釐、内長一...

第十一章 涎掛と子供前掛

第一 涎掛

涎掛の裁ち方



第十一章 涎掛と子供前掛

涎掛を造るには、キヤラコネル・タオル地ガーゼ等の地質を用ふことが多い。

● 裁ち方

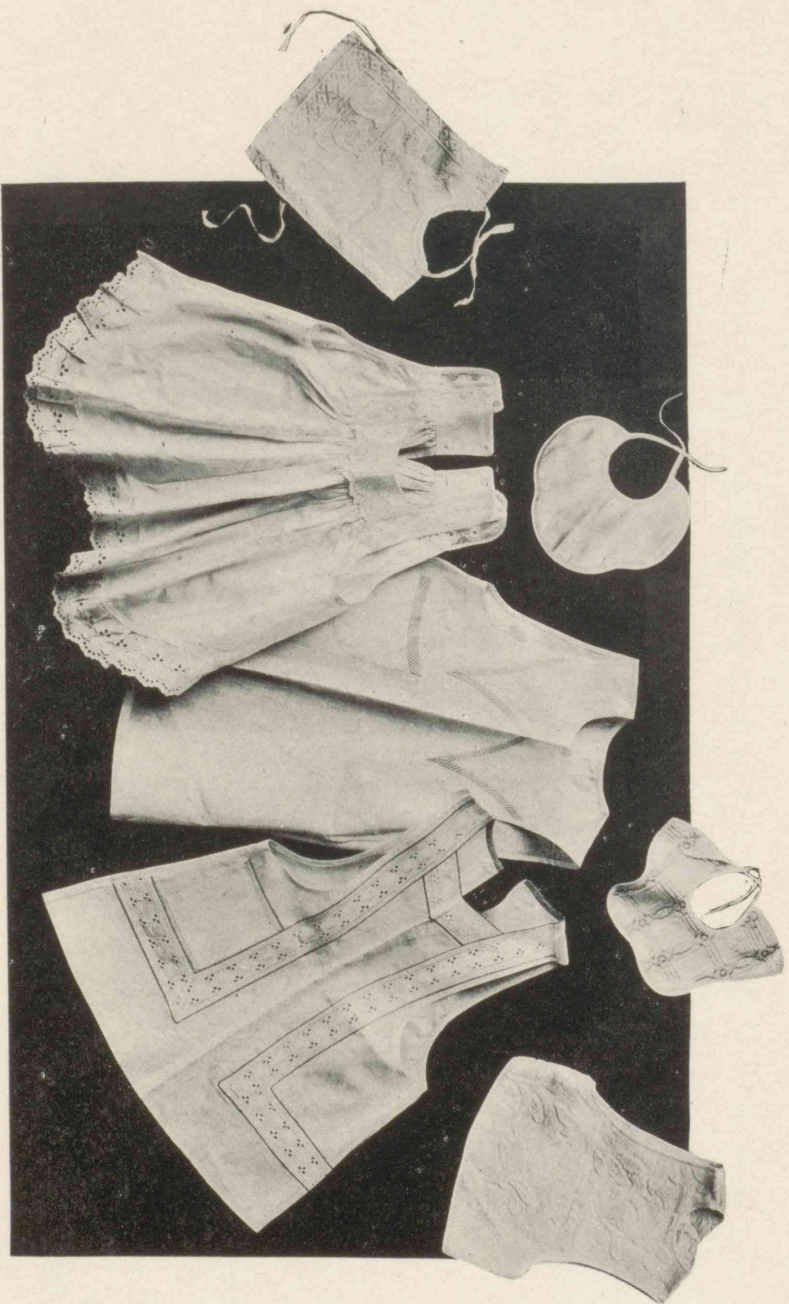
裁つには、まづ型紙を作り、次にその型紙に合わせて表裏の布及び芯地を裁つ。

型紙の裁ち方は二三の例をあげたけれども、よくその用途に適ふやうに各自工夫しなければならぬ。

● 縫ひ方順序

一、外廻り縫 表布の地質の薄いものは、裏に芯をあてて周囲をとちつけ、適當に飾り縫をし、表裏の布を中表に重ね、衿ぐりを残して周囲を六耗の縫ひ代で縫ひ、表へ返し、端から四耗入った處に飾りミシンを掛けるもよし、又巾二種位の斜切れて周囲を挟み、飾りミシンを掛けるもよい。

二、紐附 次に衿ぐりと兩方の紐になるだけのテープで衿ぐりを挟み、表



涎掛と子供前掛

からミシンを掛ける。または衿紐のかはりに釦をつけ、テープで釦掛を
つけるもよい。

又周囲にレースを用ふるならば、レースの丈は型紙の周囲を計り、これを
標準とし、縫ひ縮めるにはその一倍半を要す。但しレースの地の厚薄、巾
の廣さ、涎掛の形によつてレースの丈は適宜加減する。

第二 子供前掛

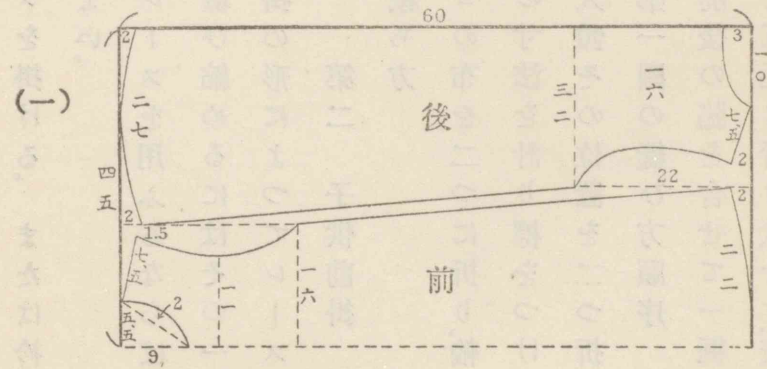
① 裁ち方

キヤラコの布を二つに折り、輪を手前におき、輪の方を前巾とす。圖の
如く各部の寸法を計り、標をつけて裁ち切る。この際胸部等に飾りをつけ
るならば大體その位置を二つ折りのまゝ標つけておく。

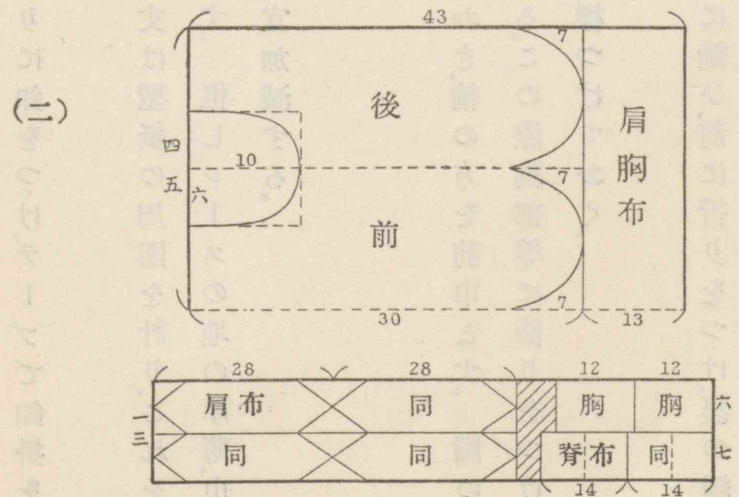
② 第一圖の縫ひ方順序

一、脇 前後の脇を合せて一纏の縫ひ代に縫ひ、前に折りをつけ、裏の縫
ひ代を五耗に折り伏せて、表から飾りミシンを掛ける。

子供前掛の裁ち方
用布キヤラコ巾 60 糎



用布キヤラコ布 43 糎



二、肩合せ 前後の肩を合せて、一糎の縫ひ代で縫ひ、後へ折りをつけ、裏の縫ひ代を五糎に折り伏せて、表より飾りミシンをかける。

三、後の仕末 後の縦を初め五糎更に二糎に三つ折りにしてミシンを掛ける。

四、衿廻り、脇ぐり 衿の廻り及び脇明を斜切れて挟み、表から飾りミシンをかける。

五、釦附穴かゞり 後に二個の釦をつけ、穴かゞりをする。

六、飾りポケット 飾り等をつけるならば右の縫ひ方の中途の適宜の處でつける、最後にポケットを右に一つ又は好みにより左右二つつける。

● 第二圖の縫ひ方順序

一、脇ぐり 脇ぐりに斜切れをつけるか、又は三つ折りにしてミシンをかける。

二、身頃 後を全部あけるならば、布の端を細く三つ折りにしてミシンをかける。もし身頃を輪にするならば、上部を脇ぐりの高さまであけて下を縫ふ。

三、裾 レースを後で接ぎ目を作つて、裾の周囲につけ、折りは身頃に返し、縫ひ代は斜切れて挟んで表から飾りミシンをかける。

四、胸、肩布附 後前の上部に縫ひ縮みをし、背布、胸布をつけ次いで肩布をつけミシンをかける。

五、釦穴かぶり、ポケット 後に二個の釦をつけ穴かぶりをし適宜にポケットをつける。

注意 裾の飾りは巾廣のレースを用ひ、肩布、胸布等もレースを使つてもよい。

第十二章 割烹前掛

割烹前掛出来上りの圖



一 裁ち方

まづ身頃とすべき丈を、大巾のまゝ一米十四糎に裁ち切り、残り布を兩袖とポケット布と紐とする。

二つ折りとして圖のやうに標をつけ、それぞれ裁ち切る。

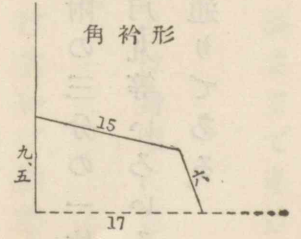
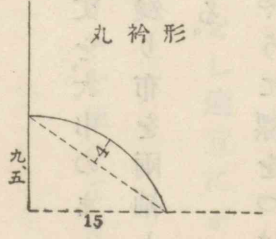
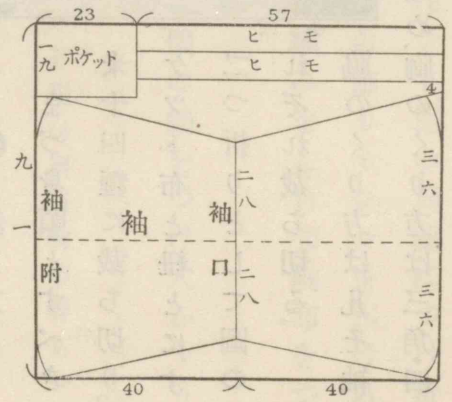
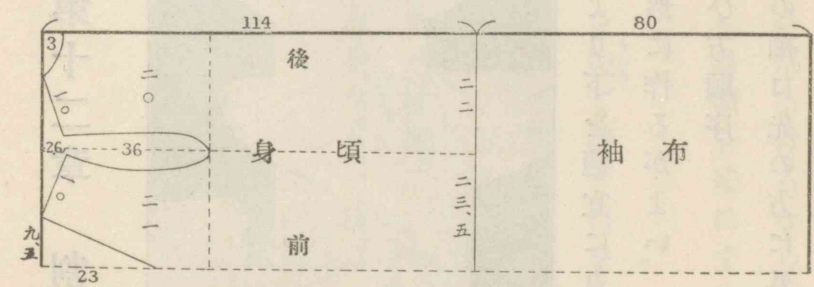
脇のくり方は凡そ袖附の三分の一眞直ぐに、それより下を適宜に丸め、胸のくり方は三角・四角・丸等いろいろある故好みの形に作るがよい。その裁ち方は圖に示す通りである。

二 縫ひ方順序

一、袖 袖下の袖口先の方に外袖にのみ五糎の處に一糎の深さの切り込

割烹前掛の裁ち方

用布キヤラコ巾 長さ1米94糎



みを入れ、袖口先の方の五糎の間を細くまつり縮にするか、又はミシンをかける。次に袖口先を普通のテープの通る位即ち出来上り一糎五耗の巾の三つ折りにしてミシンをかけるか、又はまつり縮にする。袖下を合せて縫ひ、内袖の縫ひ代を細く切り、内袖の方に折り返して外袖の縫ひ代でつゝんで、ミシンをかけるか、又はまつり縮にする。袖口に一糎巾のテープ、又はゴムテープを通し、輪にしておく。

- 二、身頃 身頃の前後の肩を合せて、半返しか又はミシン縫にし、折りは後の方に返して前布の縫ひ代でつゝみ、表からミシンをかけるか、又は裏からまつり縮にする。
- 三、衿 胸衿廻しの處に裏から斜布をつけ表に飾りミシンをかけるか又はまつり縮にする。
- 四、裾縮 出来上り二糎位の巾の三つ折り縮にするか、又はミシンをかけ

る。

五、袖附 袖の山と肩山とを合せて身頃の縫ひ代を四耗控へて待針を打ち袖をつける。折りは身頃の方に返し、縫ひ代を袖の方でつゝんでま

三つり縮にするか、又はミシンをかける。

六、紐附 紐巾出来上り一糎丈二十八糎程に四本縮ける。而して後衿肩合せの所と、それより三十五糎程下つた處につける。

七、ポケット 好みの形につくり、右袖附から四糎程下つた處の前巾に、六糎よつた處につける。

模範裁縫教科書 卷三 終り

大正十五年十二月十七日印
 大正十五年十二月二十日發
 昭和二年九月廿二日修正再版印刷
 昭和二年九月廿五日修正再版發行

模範裁縫教科書卷三
定價 金 參拾參錢
昭和二年度
臨時定價 金 五拾六錢
昭和三年度
臨時定價 金 五十五錢

著者 大妻コタ

發行所 東京市麹町區大手町一丁目一番地

印刷者 株式會社 三省堂

代表者 神保周藏

印刷所 東京府荏原郡蒲田町

株式會社 三省堂印刷部

不許複製

發行所

(東京市麴町區大手町一丁目一五番地) 株式會社 三省堂
 (大阪市南區順慶町通一丁目四十一番地) 株式會社 三省堂大阪支店

模範裁縫教科書 卷三

第一章	縫紉機之構造	一
第二章	縫紉機之修理	一
第三章	縫紉機之操作	一
第四章	縫紉機之保養	一
第五章	縫紉機之故障	一
第六章	縫紉機之選購	一
第七章	縫紉機之使用	一
第八章	縫紉機之修理	一
第九章	縫紉機之保養	一
第十章	縫紉機之故障	一
第十一章	縫紉機之選購	一
第十二章	縫紉機之使用	一
第十三章	縫紉機之修理	一
第十四章	縫紉機之保養	一
第十五章	縫紉機之故障	一
第十六章	縫紉機之選購	一
第十七章	縫紉機之使用	一
第十八章	縫紉機之修理	一
第十九章	縫紉機之保養	一
第二十章	縫紉機之故障	一
第二十一章	縫紉機之選購	一
第二十二章	縫紉機之使用	一
第二十三章	縫紉機之修理	一
第二十四章	縫紉機之保養	一
第二十五章	縫紉機之故障	一
第二十六章	縫紉機之選購	一
第二十七章	縫紉機之使用	一
第二十八章	縫紉機之修理	一
第二十九章	縫紉機之保養	一
第三十章	縫紉機之故障	一
第三十一章	縫紉機之選購	一
第三十二章	縫紉機之使用	一
第三十三章	縫紉機之修理	一
第三十四章	縫紉機之保養	一
第三十五章	縫紉機之故障	一
第三十六章	縫紉機之選購	一
第三十七章	縫紉機之使用	一
第三十八章	縫紉機之修理	一
第三十九章	縫紉機之保養	一
第四十章	縫紉機之故障	一
第四十一章	縫紉機之選購	一
第四十二章	縫紉機之使用	一
第四十三章	縫紉機之修理	一
第四十四章	縫紉機之保養	一
第四十五章	縫紉機之故障	一
第四十六章	縫紉機之選購	一
第四十七章	縫紉機之使用	一
第四十八章	縫紉機之修理	一
第四十九章	縫紉機之保養	一
第五十章	縫紉機之故障	一

模範裁縫教科書
 第三卷
 縫紉機之構造
 縫紉機之修理
 縫紉機之操作
 縫紉機之保養
 縫紉機之故障
 縫紉機之選購
 縫紉機之使用



関

広島大学図書

2000081279

